

研究

史料と伊能図

二〇一七年 第八十二号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇一七年 第八十二号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.82 2017

国立国会図書館蔵

伊能大図 七六号部分 柏崎・長岡

この地域の測量は第三次測量（青線）と、第四次測量（赤線）の二回である。

第三次測量は江戸から奥州街道を北進し、白河・会津若松・山形・秋田・青森を経て、日本海沿岸を南下、新潟を経て、図中の尼瀬（出雲崎）から柏崎に着いた。享和二年（一八〇二）十月一日のことであった。その後、鉢崎・高田（上越市）を経て海岸を離れ上田城下から中山道で高崎を経て十月二三日江戸に帰着した。

第四次測量は翌年の二月二五日江戸を出発し東海道を通り関ヶ原を経て敦賀に出た。日本海沿岸を北上し、富山を経て八月八日姫川近くの歌村に着いた。止宿に糸魚川の間屋弥右衛門が見舞いに来た。忠敬が海岸測量の手配を頼んだところ、姫川は急流で川幅は一〇〇間もあり船で渡れないので、上流の街道を渡って下さいとのことであった。

翌日、忠敬が川沿いに行つて見ると、大した急流でもなく測量隊を呼んで容易に渡ることができた。忠敬は弥右衛門らを呼びつけ「測量御用に差し障りがある」と咎めた。村役人らも不届きを詫び一件落着に思えたが、後に歴局から「急御用状」が届く事件になったのである。これが所謂、糸魚川事件である。

八月一七日、図中の柏崎を経て尼瀬で風待ちして佐渡に渡る。手分けして佐渡の測量を終え、九月一七日、寺泊に戻った。信濃川に沿って、地藏堂を

経て九月二一日、図中の長岡城下（牧野備前守）に着いた。止宿（青柳屋利右衛門）、（町数一九町、家数千二百軒）。
九月二二日、長岡城下を出立し、越後国より三国峠を越え、高崎・熊谷を経て、十月七日江戸に戻った。（宮内 敏）

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）



目次

82号

表紙解説

伊能忠敬測量経路（第3、4次の部分）

享和3、4年（柏崎・長岡）渡辺 一郎・宮内 敏
グラビア

●伊能忠敬北海道上陸の地吉岡

銅像建立を目指して

●忠敬・林蔵の足跡を踏みしめて

研究と話題

●伊能忠敬 周辺の人⑦

堀田摂津守正敦

●「随想」秀蔵の返歌

資料

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十七回

監修 渡辺 一郎・編著 井上 辰男

●多度津藩勘定方日記より

幕府測量方関係記事を抜粋（一）

原文 柴田 勲夫・渡辺 一郎

忠敬談話室

●伊能探訪―肥前・筑前の旅―

●伊能忠敬像制作記

●忠敬、江戸の仮住い

●忠敬資料の絵図「金澤八景之図」を読み解く

文 大沼 晃・写真 狼 芳明

●忠敬に着せたといわれるドテラ

●忠敬次女『篠女』の嫁ぎ先

●「伊能でGO」フィールドテスト体験記

鈴木由生子・戸村 茂昭

ニュース・会員便り・お知らせ

英国伊能小図及び関連英国海図等の

見学旅行のお知らせ

会員だより

（北海道・千葉・神奈川・福岡・佐賀・熊本）

新入会員自己紹介&会員動向

紙上総会報告



伊能忠敬北海道上陸の地

福島町吉岡

伊能忠敬銅像 建立を目指して



福島町吉岡は

伊能忠敬 北海道上陸の地である

寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日、伊能忠敬ら六名は江戸深川を出立、蝦夷地を目指した。

五月十日、津軽領三厩村（青森県）に着く、この地で風待ちすること八日間。十九日、函館を目指して出帆したが着いた所は吉岡（現福島町）だった。この日、風向き変わらず吉岡に泊る。

二十日も風向き変わらず陸地を歩いて函館を目指す。この日は福島に泊る。二二日、木古内を経て、二三日、当初の目的地函館に着いた。

福島町では伊能忠敬の蝦夷地測量が福島町吉岡から始まったという事実を後世に伝えるため「伊能忠敬北海道測量記念碑」を建設することになった。そのため「福島町伊能忠敬北海道測量記念碑建設基金」を創設。没後二百年となる平成三十年に記念碑を建設することを目指し、全国の賛同者から寄付金を募集している。

問合せ先

住所 〒049-1392

北海道松前郡福島町字福島820

〇担当 福島町役場 総務課

〇電話 0139-47-3001

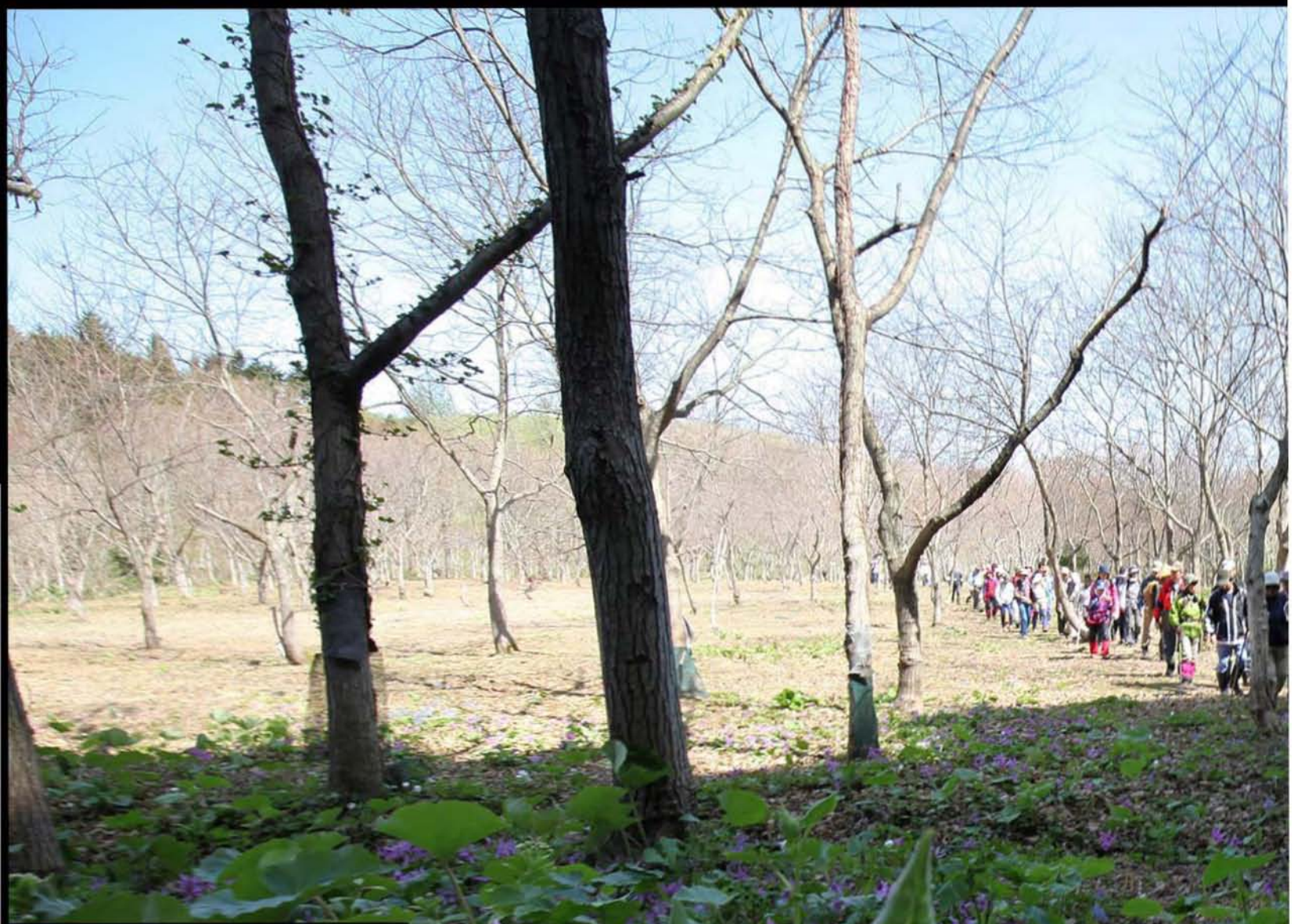
〇FAX 0139-47-4504

E-mail zmu@town.fukushima.hokkaido.jp



忠敬・林蔵の足跡踏みしめて

松前藩主らが歩いた旧街道を行く「第24回殿様街道探訪ウォーク」が去る5月3日開催された。テーマは「伊能忠敬と忠敬の弟子の間宮林蔵」 約100名が新緑の散策を楽しんだ。先頭は本会会員で福島町史研究会長の中塚徹朗氏。福島町長、本会員の齊藤サダ様も参加。



伊能忠敬 周辺の人⑦

堀田摂津守正敦 前田幸子



はじめに

堀田摂津守正敦は伊能忠敬の測量事業を指揮監督した幕府の若年寄である。その名前は忠敬への任命書、測量旅行の命令書等の公文書の中にみられるが、忠敬の『江戸日記』や書簡類の中にもしばしば登場している。若年寄といえば幕府組織の中でも老中に次ぐ高官であるが、忠敬にとつては雲の上の人ではなかった。第三次測量の途次、忠敬は久保田(秋田)で残暑と雨に苦しみ、体調を崩してしまった。その夜、忠敬は正敦に拝謁する夢を見たという。忠敬の堀田侯に対する厚い信頼と敬意を表わす逸話ではないだろうか。幸いなことに、堀田侯は四十数年も若年寄として在任し、十七年間の測量事業の最初から最後まで一貫して統括指揮官として支援し、大事業を成就せしめた。その幕政における業績は偉大であり、履歴から現れる人物像は巨大かつ謙虚である。今回はたぐいまれな人格者であり、当時の幕政のレジエントともいべき存在であった堀田正敦について、伊能測量との関係を中心に考えてみたい。

【夢に堀田侯に謁す】(第三次測量)

『測量日記』享和二年(一八〇二) 七月

「同二十六日 朝大雨、五ツ半頃より北風になり晴。午前より午中晴、太陽を測る。夜小雨。予二十五日より病氣、此夜(二十六日)夢に堀田侯に謁す。」

仙台での前半生

※年齢は数え年

○伊達家の公子

堀田正敦は宝暦五年(一七五五)七月二十日に奥州仙台藩主伊達宗村の八男として仙台で生まれた。忠敬より十歳年少である。母は側室坂氏。幼名藤八郎、十六歳で元服して村由と改名し、二十一歳で通称を摂津と改めた。正敦と名乗るのは堀田氏の養子となつてからであるが、本稿では便宜上、全て正敦と表記する。

なお、正敦の生年を宝暦八年とする史料がある。これは正敦が伊達宗村(宝暦六年没)の八男であるとする記述と合わないことになり検討を要するのので、本稿では諸本の記述に従つて宝暦五年生れとして話を進める。詳細は稿末の「堀田正敦の出生年について」を参照されたい。

○青年時代

正敦の仙台在住時代の逸話はほとんど伝わっていない。しかし正敦の歌集や文集などの著作、あるいは諸本にみえる人物評からは若年より文武の道に励んでいたことがうかがわれる。

正敦の学問の師は仙台藩の漢学者であった田辺希文(一六九二—一七七三)と畑中荷澤(一七三四—一七九七)であつたという。田辺希文は『伊達世臣家譜』の編纂に携わつた歴史家・神道家であり、畑中荷澤は国学や和歌にも造詣が深い文芸家としても知られる。正敦は歴史に通曉し、また和歌を善くした。著作は漢文のものもあるが、主にやまとことばで書かれている。

伊達家は伝統的に和歌の道に造詣が深かつたので、早くから和歌の道や古典に親しむ環境があつたからだといわれる。

○林子平と伊達家、伊能家

堀田正敦と伊能忠敬の両方に関係する人物として林子平(一七三八—一七九三)がいる。

正敦は十九人いた伊達宗村の子供のうちの第十八子であつたが、第十四子・方子は林子平の姉・奈保(側室・於清の方)の子であり、長じて茶人として著名な出雲松江藩主松平治郷(不昧公)に嫁した。林子平の父・岡村良通は学識ある人物だったが元文五年(一七四〇)人を傷つけて江戸を出奔、仙台藩士(医員)となつた息子を頼つて仙台に住んだが、その後下総に来て伊能一門の伊能茂左衛門景良(国学者・歌人 楳取魚彦)宅に寄食した。子平は健脚で知られ、蝦夷や長崎を遊覧し情報を収集して地図作りに励んだ。著書『三國通覧図説』は仏訳版により世界にも流布した。工藤平助、大槻玄沢らと交友し、天明七年五十歳の時、仙台で僅か三十八部刊行した『海国兵談』が発禁処分となり江戸に護送されて入牢、蟄居処分となつた。正敦が若年寄に就任した翌年で仙台藩の後見をしていた時期である。

【写真】野帳と筆を持つ林子平の像

仙台市勾当台公園



後年「水月」と号し、松平定信らの文人サロンで活躍する素地はこの期間に培われたと考えられる。また正敦は馬術や武術、その他の諸芸にも秀でていたといい『よしの冊子』、鷹狩などでも優れた技量を示した『続徳川実紀』。

なお、只野真葛（仙台藩医・工藤平助女）の『むかしばなし』に正敦（二十三歳頃）が築地の工藤邸の普請開きにやって来たという記述がある。正敦が当時出府していたこと、工藤平助と交際があったことがわかる。同じく仙台藩医だった桑原隆朝純とも早くから交際があったと思われるが、それを裏付ける資料がない。

○別家当主・中村村由

正敦は二十一歳のとき中村姓を下賜されて別家を興し、中村村由を名乗った。その際に一万石を与えられたようである。『よしの冊子』に「今は一万石もらって楽ではあるが、なんとかして公方様の御人（臣下）としてお仕えしたいものだ。お仕えさえできれば旗本でもよい」と常々言っていたという逸話が載っている。「公方様の御人」になるのは外様大名の子息では難しかったので、譜代大名か旗本家の婿養子になることを望んでいたと考えられる。そのためであろう、正敦にはすでに側室（妾）が二人と子供が三人いたが、正妻は迎えていなかった。

正敦の望みがかなって養子先が決まったのは三十二歳の時である。天明六年（一七八六）三月、堀田家の養子となるため仙台を離れて江戸へ出るこ

この養子縁組が成立した事情、持参金等の詳細は不明であるが、この縁組により以後の正敦の人生が飛躍的に展開することとなった。

江戸での新人生

○堀田家の婿養子

天明六年（一七八六）三月二十三日、江戸に到着した正敦は、三日後には早速堀田正富の養子となり、その娘との婚約も取り交わした。養子先の近江堅田藩堀田家は名門佐倉藩堀田家の分家にあたる一万石の譜代大名で、しかも藩主は定府（江戸常住）の大名という、幕府の役職に就くにはうってつけの家だった。養父となった堀田正富（一七五〇―一七八七）は正敦とわずか五歳違いでまだ三十七歳だった。子が二人あり、正敦の正室となつた女子のほか梅之丞という男子がいたが、正敦を養子に迎え家督を譲って隠居、五年後に四十二歳で病没した。

正敦は堀田家の養子となり婚約した後も、仙台から連れてきた妾や子供とともに仙台藩下屋敷で暮らしていた。翌年の天明七年五月、幕府から婚姻許可が出たらしく、麻布白金の堀田邸に移り、堀田家代々の通字「正」の字を承けて諱を正敦と改めた。六月に婚礼、七月に將軍家斉に初御目見、九月に家督相続、十二月には従五位下摂津守に叙任、という経過を経て、堅田藩主堀田摂津守正敦が誕生した。

念願の譜代大名となり、三十三歳でやっと有資格者になったわけである。しかし正敦が幕府の役職を得て「公方様の御人」となるのは、さらに二年後、出府から数えて三年後のことである。

○松平定信との出会い

正敦は出府後の三年間のどこかで松平定信と出会ったと考えられる。『よしの冊子』には正敦が「江戸へ出た当初は仙台弁で耳障りだった」が、「その有能さで、人材発掘をしていた定信に見出された」という逸話が載っている。その時期は『宇下人言』（定信の回顧録）にみえる交友関係の記述から、定信の老中就任後の天明七年以降であろうと推定されている。どのような機縁で知り合ったかは定かではない。大名となつた正敦が、定信の文人サロンに参入したとも考えられる。定信は家格として大番頭どまりだった堀田家の正敦を若年寄に抜擢し、正敦も定信の期待によく応えた。両者は晩年まで公私にわたる緊密かつ良好な関係を築いた。

○幕政への登場

定信によつて見出された正敦は、寛政元年（一七八九）四月、ついに念願を果たし、大番頭とし



堀田正敦肖像画

佐野市郷土博物館提供

て幕府の役職に就いた。その翌年（二七九〇）六月には若年寄に昇進、麻布白金の堅田藩邸から大手前の官邸に移った。以後、四十年間もここに住み続け、「大手侯」「大手様」と呼ばれたことは周知の通りである。

正敦の若年寄としての主たる職務は勝手掛すなわち財政担当であった。正敦は文教担当としての活躍が知られているが、実は長年にわたって幕府財政の立直しに奮闘していたのである。正敦は勝手掛としても有能だったらしく、就任四か月後には勝手掛の統括に任じられている。

六年後の文化三年二月、勝手掛としての多年の精勤の労に対し三千石を加増された。その後も文政二年（一八一九）六十四歳で免じられるまで、二十九年間も勝手掛を勤めた。

○寛政の改革

正敦が出府した天明六年（二七八六）は家治から家齊への將軍の代替わりの年であった。家治に重用された田沼意次が失脚し、翌年松平定信が老中首座となつて寛政の改革に着手、田沼の重商傾向をあらため、農村を重視する政策に転換した。天明大飢饉後、没落農民が都市に流入し、農村の疲弊と都市問題を引き起こしており、また幕府や諸藩の財政悪化を招いていたからである。定信は改革の断行を輔佐する若手の人材を発掘し、閣僚に抜擢した。老中首座は六十九歳の田沼から三十歳の定信に代わり、人事は一新された。

正敦と定信はともに飢饉で大打撃を受けた奥州の出身であり、問題意識を共有していた。正敦は定信の政策を迅速かつ着実に処理し、人格を備えた能吏として活躍した。その手腕は「利刃の毛を

吹くが如し」（切れ味の鋭い刀のようだ）と評された。

○享保の遺制、

いわゆる寛政の改革とは、天明七年七月、「享保の遺制」に則る旨を申し渡して始まったものである。すなわち、將軍吉宗の治世である享保時代のやり方を模範とするというものであった。定信は吉宗の孫にあたり、祖父の事績を非常に尊敬していたからである。吉宗が果たせなかった事業の実現をも目指したといわれる。

○吉宗の改曆事業

將軍吉宗は自然科学を好み、江戸城吹上御苑の天文台で自ら天文観測を行い、観測機器の考案までした理系の人間であった。

吉宗は天文曆学に熱心に取り組み、西洋曆学を取り入れた改曆を命じた。渋川春海が作った貞享曆がすでに合わなくなってきたからである。紆余曲折を経て宝曆曆が出来たが、数年後に早くも日食の予報を外すなど欠陥が露呈し、この改曆は失敗に終わった。

○吉宗の地図事業

將軍吉宗はまた地図の愛好者でもあった。吉宗は日光社参詣に際し、書物奉行が六国史類（古事記や日本書紀など）を持って供奉する慣例をやめて近辺の国絵図や城絵図を持参させ、近郊にでかける際にも必ず江戸地図を持参したという逸話が伝えられている。

また、在任中に国絵図を三四三回も閲覧して世間の噂にまでなっていたといわれる。



紅葉山文庫の御国絵図箱
国立公文書館蔵

吉宗は江戸城紅葉山文庫の国絵図を殿中に運ばせて自ら調査検討し、その結果甚だ不正確であると断じて建部賢弘（一六六四—一七三九）和算家・天文学者に改訂を命じた。建部は正確な地図を作成するには天体を観測して経緯度を測定し、かつ実地の測量が必要であると説いたといわれる。しかし天体観測を伴う地図作りは吉宗の治世中には実現しなかった。

○定信の文教政策

松平定信は「昌平坂学問所の設立」「寛政異学の禁」「学問吟味」「素読吟味」の実施等、その後の幕政の基本となるような重要な施策を短期間のうちに繰り出した。それらは定信の強力なリーダーシップの下で行われたものだが、正敦の卓越した行政能力があつてこそ実現したものともいえる。吉宗が果たせなかった改曆事業は寛政の改曆として実現し、また正確な日本地図は伊能忠敬の実測日本全図として実現した。以下、正敦が管轄した主な文教事業を年代順に挙げる。

◆『よしの冊子』の人物評◆

◇『よしの冊子』は老中松平定信が家臣に世間の風聞や情報を収集させた報告書である。記述内容はあくまでも噂であり必ずしも史実とは限らないが、当時の世相をみるのに貴重な資料とされる。この中から若年寄就任前後の正敦に関する記事を紹介する。

(見出しは筆者による)

①公方様の御人

堀田摂津守殿は有能な人物だそう。 (松平定信が人材発掘をしている。当節、見出されてしかるべき人物であるとのこと。仙台侯の八男で堀田家へ養子に來られた。江戸へ出た当初は仙台弁で耳障りだったそう。仙台でも摂津という名で、部屋住み時分に「今は一万石もらって楽ではあるが、なんとかして公方様の御人(臣下)としてお仕えしたいものだ。お仕えさえできれば旗本でもよい」と常々言っていたそう。その後江戸に出て袖ヶ崎の仙台藩下屋敷に住んだが、その屋敷に妾を二人置いていて、「いと」という女性には常之丞という子もいるそう。堀田家へは妾のことを隠して婿養子に來られたそう。その妾と常之丞は今も袖ヶ崎におられるとか。

②文武両道、多芸多才

摂津殿は文字も和歌も上手。源氏物語の講釈など諸侯方でされる由。同じ兄弟でも兄の土井山城殿は淫蕩で、そのせいか去年隠居されたそう。堀田摂津殿は馬術巧者で名人級の腕前。大名では堀田、旗本では近藤左京と言われている。堀田侯は武芸にも秀で、その他も多芸。御養父

である堀田正富のほうは、梅之丞とやら申された時分はひどく放蕩で、一度は座敷に押込になった。今でも放蕩だという評判である。

③仙台藩の後見

堀田摂津守殿は元來慈悲深く才覚や知略も有るので仙台中の人々が感服して、あの方が当主になったらよかるうに、と言っているそう。仙台侯(兄・伊達重村)は部屋に引きこもって家老にもめったにお会いにならないので家中がみんな困っていたところ、摂津守殿は案内なしに居間へ入って行つて話などされても仙台侯は小言を言わなかったそう。近頃、松平定信公の仲介により摂津守殿が藩政に関わるようになって改善された由。そのご褒美という思召しか、このたび摂津守殿が大御番頭に仰せ付けられた(④へ続く)

松平定信公が堀田若狭守(摂津守の誤り)を呼んで仙台の事をとくと言ひ含められたそう。仙台侯(伊達重村)を隠居させ、全体を改めるのがよいと仰ったという話だ。そもそも定信公の就任以前から、仙台中は越中様(老中・牧野越中守)へお使い申上げて御療治を願いたいと申していた由。重臣達百二十人ほどが願書を差出したという話もある。片倉小十郎(家老)など内々越中様へ御願い申し上げたという話もある。いずれにしても今の仙台侯がご家督では改まらない由。

④組風改善

摂津守殿が大御番頭に仰せ付けられたところ、大番組(警衛組織)は元來、組の気風が甚だ悪いのだが、摂津守殿が世話を焼いて文武を奨励し、学問する人には講釈をしたり文章を書かせたりして

いるそう。配下は文句を言っているが、総じて適切な計らいだという評判をとって、このたびまたまた(若年寄に)拔擢されたとのこと。今はまだ田舎者風のところがあろうが、ゆくゆくは御勝手方にもなるだろうとの評判である。

⑤あれがならずに誰がなる

摂津守殿はとても人柄が良く、病身の養祖母へのお仕え方も非常に宜しいとのこと。養祖母の兄弟である松平玄蕃頭も感心して「当節、あれが若年寄にならないで誰がなるのだ」と申されたという話だ。

⑥湯茶の思いやり

御目見以下の人々があちこちに「対客登城前」(就職活動のため登城前の幕府重職の邸に御機嫌伺に参上する慣行)に出て、たばこは吸うが湯茶に渴していたところ、若年寄に來られた堀田侯の所では大薬缶にいっぱい茶を入れて茶碗も十個ばかり出しておいなので大いに喜ばれたそう。薬缶が空になればお茶を入れ替えて出し、たばこ盆の火も入れ替えて細やかに気配りされているよし。今度青山(青山幸完 寛政三年九月辞職)の後任の若年寄が來たら堀田侯が師匠役だろうから、おそらくお茶のことも伝達されるだろうと喜んでいたので。

⑦朱子学の勉強会

堀田摂津守は服部善藏(栗倉)を招いて『近思録』(朱子学の教本)の会を始められたそう。摂津守は漢文をかなり読めるとのこと。近頃は経学(儒学)の勉強をされているとのことである。

○天文学者調査 天明七年（一七八七）

正敦の就任以前のことであるが、学者等の調査が行われた。『続徳川実紀』天明七年（一七八七）七月の条に「此月文学并軍学、天文学より、凡て武芸の師たる者の姓名、流名、年齢、居所等委しく記し出すべしと触らる」とあり、天文学ほかの学問や武芸の師匠の所在調査が行われたことがみえる。前月に老中に就任したばかりの定信が、文武奨励政策の実施に先立って全国的な調査をしたようである。大坂で天文暦学の私塾「先事館」を開いていた麻田剛立もこの調査でリストアップされたはずである。

○寛政改暦 寛政七年（一七九七）正敦43歳

西洋天文学による改暦は吉宗以来の念願であったが、そもそも儒教思想では人民に正しい暦を授けるのが為政者としての任務とされたので、すでに合わなくなっていた貞享暦の改定は定信としても急務であったと考えられる。寛政七年四月、高橋至時が江戸に召出され、改暦事業が始まった。定番同心だった高橋至時を旗本に抜擢し、町人身分の間重富を天文方に採用するなど、前代未聞の人事でも話題となった。至時、間らの奮闘によって新暦は寛政九年十月に完成し、正敦は十二月二十七日に改暦御用取扱の労より褒賞を受けた。このあと正敦が私人所有の『ラランデ暦書』を高橋至時に貸し与え、のちに大金で買い取って与え、至時が『ラランデ暦書管見』を著したことは周知の通りである。

○『寛政重修諸家譜』寛政十一年（一七九九）

この事業は「諸大名以下、幕臣御目見以上」の

諸氏の系図・略歴を編纂するもので、寛政十一年に「堀田摂津守正敦の請ひ申すにより」すなわち本人の請願によって正敦に系図の書継ぎが命ぜられた。同族の堀田豊前守正毅（近江宮川藩主）を副に、大目付一人、目付二人、奥右筆組頭一人、奥右筆六人の体制で正敦・正毅の邸にその局を設けた。

編纂作業に従事する者は、正敦の家臣らを含めて五十人ほどもいたといわれる。取調にあたり「不明の事があれば堀田摂津守正敦、堀田豊前守正毅から直に尋問があるし、所属がある者については所属長に問い合わせるので、その旨心しておくように」とのお触れが出た。のちに書継ぎを重修（校訂）に変更して、十四年後の文化九年（一八二〇）十月に完成した。一五三〇巻。『寛政重修諸家譜』と命名された。序文は正敦が書き、編纂の意図を格調高い漢文で述べている。文化九年十二月二十三日、正敦は功勞により將軍の御前で佩刀を賜った。『寛政重修諸家譜』は現代でも江戸時代を研究する者にとって必須の史料とされている。

○全国測量事業 寛政十二年（一八〇〇）46歳

御勝手掛の主務のほか『寛政重修諸家譜』の編集という大事業を拝命した翌年、正敦は全国測量事業に関わるようになった。周知のように、この事業は忠敬の個人事業として始まり、幕府は「測量試み」として許可と補助金を与えた。

第一次、第二次測量は蝦夷地関連事業ゆえに蝦夷掛と交渉を要し、勘定改役鈴木甚内、徒士目付細見権十郎から辞令書のようなものが交付された。第三次測量からは天文方を総括する若年寄である

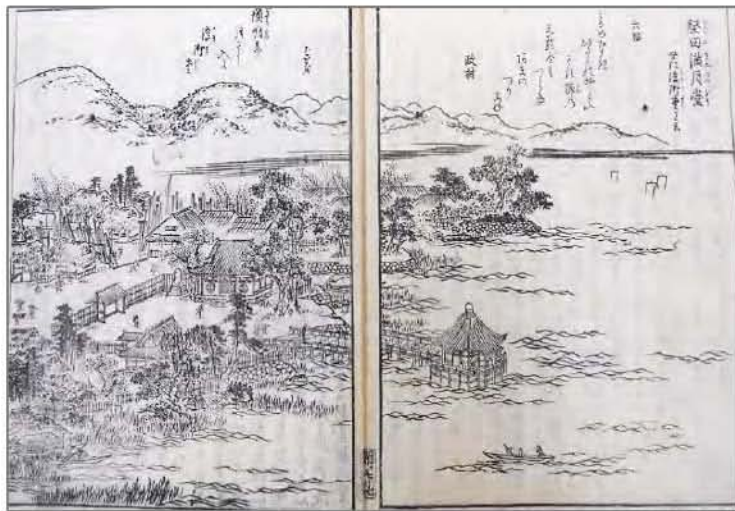


松平定信像 福島県立博物館蔵

正敦名で諸辞令が出された。第三次からは待遇が格段に向上し、経費のほとんどが支給されるようになった。これは御勝手掛を兼ねていた正敦の管轄になったからだと思われる。忠敬は大船に乗った気持だったのではないだろうか。第三次測量の途上、病気になる忠敬は正敦の夢を見たが、忠敬にとって正敦は守護神のような存在だったのであろう。

しかし一方、幕府の後ろ盾が強力になるにつれて忠敬ら一行の態度も尊大になり、現地の村役人らとの摩擦が増えたとの指摘もある。第四次測量では「糸魚川事件」が起きて忠敬らは勘定所に訴えられた。また第五次測量では隊員が不祥事を起こし、正敦の指示によって内弟子の平山郡蔵らが破門された。これらは偶発的なものではなく、起こるべくして起きたという見方もされている。

測量行が回数を重ね、次第に作業がシステム化されて安定すると、指揮監督は天文方の高橋景保に任せられ、正敦が表面に出て来ることはなくなっていた。



『近江名所図会』堅田満月堂（浮御堂） 国立公文書館蔵

第一次から第四次測量の結果は文化元年八月に『日本東半部沿海地図』として上呈、九月六日に将軍家斉の上覧に供された。一方、測量事業の最終結果である『大日本沿海輿地全図』は文政四年七月十日に上呈、孫の伊能忠誨と下役らが江戸城大広間に大図・中図・小図を展示し、老中、若年寄が閲覧した。しかし、将軍の上覧はなかった。褒賞も天文方までで幕閣の褒賞はなかった。改暦事業では老中や若年寄にも褒賞があったことと比べると、測量事業は改暦事業より下位の位置づけだったようである。

○琵琶湖図 文化二年（一八〇五） 51歳

伊能図の中に大縮尺で絵画風に描いた美麗な琵琶湖図がある。

文化二年閏八月、伊能隊が第五次測量で琵琶湖の周囲を三十八日間もかけて測量し、仕立てたものである。幕府要人や知友への謹呈用に作られたといわれる。もしそうであれば、謹呈の相手方として最もふさわしいのは測量事業の統括者であり、近江堅田の領主でもあった正敦であろう。

堅田は近江八景「堅田落雁」で知られる景勝の地であるが、正敦は一度も国入りしなかった。堅田藩では藩主も家臣も江戸に在住し、必要人数の家臣だけを堅田に派遣していたからである。藩主でありながら国元に行ったことがない正敦のために、景保がこの図が作らせたとも考えられる。

なお、景保に琵琶湖測量の苦勞を訴える忠敬の

○堅田藩士・山田聯（二七八—一八四六）

堅田藩士山田聯（通称・綱治郎、綱次郎）は堅田藩の儒者であり、北方図の作製で知られる地理学者でもあった。堀田摂津守の臣下として伊能忠敬の地図事業に関与し、地図の貸借などで忠敬の『江戸日記』にしばしば登場している。また私的な交際もあつたようで、忠敬あての借金依頼状が世田谷伊能家に残されている。「借用金残り五両、拝借懇願 町方・同心・藩中に頼めば、請人必要にて、藩へ外聞よろしからず」（文化十二年二月二十八日付）という内容である。なお、高橋景保は山田聯の北方図に関する説に甚だしい誤謬があるとして、間重寛宛の書簡の中で山田を「遍癖」「凡愚癖頑」「狂人」等と酷評している。

書簡が残されている。湖畔の芦原は堅田の雁の恰好の住処だったが、湿地帯のため測量隊は大いに難渋したのである。

絶大な信頼

○仙台藩の後見 寛政元年（文化九年35）58歳

仙台藩は大藩であるうえ、北方防衛の点においても、江戸を支える仙台米の産地としても、幕府にとって重要な藩であつたが、伊達重村が藩主のとき仙台藩の内政は治らず、家中から幕府へ「御療治」を願う動きが度々あつた。『よしの冊子』に定信が正敦に仙台藩の藩政に関与させたとある改善されたので、ご褒美に大番頭に取り立てたとある。その後、重村を隠居させ、若年の斉村を藩主に据えて正敦に後見させた顛末が述べられている。

このあとも仙台藩では藩主の夭折が続く、正敦は文化九年まで二十数年間も幼年藩主を戴く仙台藩の後見役を勤めた。後見と言っても特に藩政に介入することはなかったが、正敦が後見することで内外に安心感を与える効果があつたといわれる。寛政年間に企てられた「さむらい一揆」（困窮家臣の一揆）は、願いが聞き入れられなければ江戸に登って正敦に直訴する、という内容であつたという。正敦が藩の上層部はもちろん、藩政に不服を持つ家臣たちの信頼をも集めていたことがわかる逸話である。

なお、正敦は病弱だった佐倉藩主堀田正愛を輔佐して、一時佐倉藩の後見もしている。

○蝦夷地御用 文化四年（一八〇七） 53歳

文化四年、ロシアによるエトロフ島襲撃事件が起き、幕府は指揮官を派遣し現地を巡検させるこ

とにした。老中らの論議で、指揮官の人選が行われたが、老中・牧野備前守が「依頼する」としたら仙台藩が最も適任である。藩主（伊達重村の孫・周宗、当時十二歳）は幼いけれども堀田正敦はその叔父である。これを指揮官にすれば、仙台の家士（従軍家臣）もまたこれを敬い尊重するであろう」（『東藩史稿』）と発言し、これが了承された。六月、五十三歳の正敦は蝦夷地に出発した。仙台藩医桑原如則が侍医として随行したことは周知の通りである。なお『甲子夜話』の記事によると、この巡行は仙台藩、会津藩の軍勢千五、六百人と医師五人、大砲も数多く従えた大行列だったという。若年寄の重職にあった正敦を危険な紛争地に派遣したことには疑問を感じざるをえないし、また仙台藩主の叔父（大叔父）である、という理由はこじつけのようにも思われるが、それだけ正敦への期待と信頼が厚かったということであろう。

○寛政の遺老

松平定信は天明七年に老中首座となって寛政の改革を開始したが、六年後の寛政五年に老中を辞任した。しかし代わって老中首座に就いた松平信明をはじめ、定信に抜擢された幕閣らによって定信の改革路線は引き続き実行され、文化十四年までおよそ二十四年間継続された。これら改革を継続させた幕閣は「寛政の遺老」とよばれた。定信は辞任後も彼らと親密な交流をもち、幕政に影響力を及ぼし続けた。

正敦は若年寄を四十二年務めたが、他の人々も在職年数が長かった。老中・松平信明は在職通算二十八年、林大学頭述斎は四十七年、将軍家斉は在位五十年、隠居後も実権を握り続けて「大御所

時代」と呼ばれたが、その期間を含めると、なんと五十四年間となる。江戸時代が二百六十数年間であることを考えると、驚異的な数字といえるのではないだろうか。

○正敦の私生活

正敦の職務の質と量を考えると、余暇の時間はほとんどなかったように思われる。しかし実際は少なからぬ著書があり、また『観文禽譜』という大作も著した。正敦は幕閣となつてからも「お城から退出して帰宅後も必ず書物を手にし、あたかも老学究のようであった」（『松前紀行』解題）と伝わる。また「壮年になつてから服部栗斎について学問を学び、その傍ら皇国史典を好み、文章と和歌を善くし、寛政名臣でも最も優れた人であった」（族譜稿、族譜、東藩史）ともされている。余暇は学問に費やしていたようである。

一方、正敦は松平定信を中心としたサロンで学術や文芸を楽しんだ。定信は築地（現・築地市場）の下屋敷に浴恩園という庭園を所有しており、そこで正敦ら同好の士とともに文学や風流の道を楽しんだ。『甲子夜話』には定信が他界した時の正敦の落胆が甚だしかった様子が記されている。

蝦夷地巡行に際して定信に仙台藩の後見を託したのも親しさと信頼のあらわれであろう。正敦が最も敬愛し、信頼したのは定信だったと思われる。

時代の転換

○水野忠成の時代（文化十四年）正敦 63歳

文化十四年、正敦は在職二十八年、六十三歳となつていた。この年八月、「寛政の遺老」老中首座・松平信明が病気で死去すると、これを境に幕府の

勢力図が大きく変化した。

信明と入れ変わって老中格になったのは将軍家斉の寵臣・水野忠成（一七六二―一八三四）であった。忠成は側用人であつたが老中格を兼ねて勝手掛を担当し、正敦は褒賞を与えられて勝手掛を罷免された。以後、忠成は死去の年まで十七年間も老中首座・勝手掛を勤めることとなった。

忠成は田沼意次の子・意正を若年寄に取り立てて腹心となし、将軍家斉から政治を委任されて専権をふるつた。側近に政治を委ねて家斉は奢侈にふけり、政治は腐敗して田沼時代以上の賄賂と請託が横行、世人はこれを「水の出てもとの田沼になりにけり」と諷刺したという。

○シーボルト事件（文政十一年）正敦 74歳

文政十一年、「寛政の遺老」も老齢となつて辞任する者や死去する者が相次ぎ、残るは正敦ただ一人となつていた。そのような時期に「シーボルト事件」が起きた。

天文方高橋景保は定信グループの中では四十四歳とまだ若く、外国語能力や天文学、地理学等の専門知識を持ち、御書物奉行の要職にあつた。特に対外政策においては幕政を主導する発言力を持つ実力者だったが、国禁の地図を外国人に渡した罪で逮捕され、翌年獄中で病死した。終始景保を取立ててきた正敦だが、このときすでに七十四歳。閣内の同志も去り、もはや水野忠成政権の下で景保を庇護する力はなかったようである。

○『観文禽譜』天保二年（一八三一）頃 76歳

正敦の著作のなかで最も著名なのは鳥類図鑑『観文禽譜』『禽譜』である。

この書は数種が伝わるが、一例をあげると四三八種の図譜および解説文十二冊で構成される。質・量ともに江戸時代最大の鳥類図鑑とされる。図は自家の所蔵図のほか諸大名や学者等から転写して絵師に原寸大に描かせ、解説文は正敦が記述した。この書は我が国の本草学の一点を示すものとされるが、同時に解説文として和漢の古典から膨大な作品を引用・掲載しており、「鳥の歌学書」というべき側面をもつと評されている。

蝦夷地の鳥も収録されており、正敦の学識と知見、および広範な交友関係を活用して編纂されたものである。博物学の『本草綱目』例に習って鳥を分類し、解説文を加えたものであるが、若年寄就任直後頃から着手し、最終的には辞職の前年の天保二年に完成したとみられ、ほぼ在任期間の四十年間にわたる、まさにライフワークというべき大著である。正敦の仙台在住時代の回想的記述も多いことから、若い頃から鳥に関心があつたことがうかがわれるという。もとは堀田家の鼻祖正高の遺図を草本とし、実父宗村の遺志をも汲む形で鳥の解説を記したのが始まりであると自序に述べられており、徐々に内容を増やし、補い、深めていったといわれる。

なお、本書の画像は宮城県図書館、国立公文書館、国立国会図書館、東京国立博物館のWebで見ることが出来る。また、本書を基に編纂された『江戸鳥類大図鑑』が平凡社から刊行されており、図書館などで閲覧できるので、ぜひ一覧されたい。



『禽譜』 鰻とびりか 宮城県図書館蔵

鰻とびりか

或ヒルカト云モ俱ニ
蝦夷方言

頭は鵞鵝（オシドリ）のようで全身黒色、鳥（カラス）のようだ。嘴（くちばし）は丹（あか）くて鵞鵝（インコ）の嘴のようだが扁平で大きく先が少し曲がっている。エトロフ島の周辺に多い。



『観文禽譜』表紙



解説文 鰻とびりか
国立公文書館蔵

寛政の初年に蝦夷へ巡行した者がその頭部だけ持ち帰って贈ってくれた。同五年秋八月、また全身の皮を剥いだものを贈られた。その形状は思うに善知鳥の種類であろう。蝦夷の方言で良いということ、それをビリカという。良い日和ということ、それをビリカトフカブといい、風の良いことをメトビリカという。だからエトロフ島の良い鳥というのを略してエトビリカと称したのであろう。

〔頭注〕○蝦夷の女はこの嘴をいくつも繋いで髪の毛の飾りとする。（※この情報はゴロウニン『日本幽囚記』に記載されているものという。）

○正敦の家族と周辺人物

正敦の五男の正衡は藩主となり、また父と同じく若年寄をつとめた。正衡は絵を善くし、正敦を助けて『観文獣譜』『観文介譜』を著した。二男の敬頭は奥州一関の田村右京太夫の養子となり、田村宗頭と名乗った。また、甥に『雪華図説』の著者で大塩平八郎の乱を平定した事蹟で知られる古河藩主、老中の土井利位がおり、土井家の家老には著名な蘭学者・鷹見泉石がいる。また、明治初期の代表的洋画家である高橋由一は文政十一年、佐野藩士高橋源十郎の嫡子として江戸大手前の藩邸内で生まれたという。藩主正衡の近習となり、のち図画取扱も勤めた。

このほか正敦と交際があった人物としては仙台藩医工藤平助、大槻玄沢、桑原隆朝純、奥医師・桂川家歴代、平戸藩主・松浦静山、林大学頭述斎、正敦が京都から招いた本草学者・小野蘭山、国学者・屋代弘賢、歌学方・北村季文、画家・谷文晁、儒学者・尾藤二州、等々枚挙に暇がない。正敦は学者や文化人を保護し、また自ら文化文政文化を花開かせたとも言える。

○老中を辞退する

正敦が老中に推挙されたが断ったという逸話が『松前紀行』解題にみえる。「西の丸の閣老が欠けたので某閣老が正敦を後任に充てようと内意を問うたところ、正敦は辞退して「私は常に忠誠を以て分を守り、楽翁氏（定信）の推挙を辱めないことを願ってきた。今はもう楽翁氏の時代ではない。私が高齢だというだけで建言が聴かれるだろうが、それは天下のためにならないし、私の意思ではない」として峻拒したという。

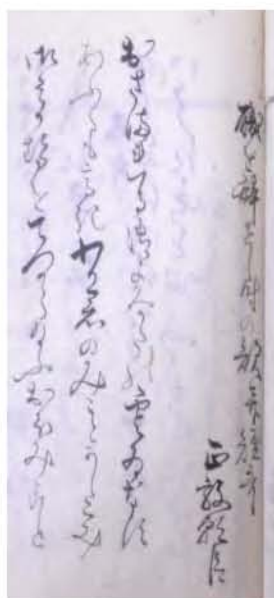
○辞職の歌

辞職に際して正敦は、將軍手ずから佩刀を賜った。その嬉しさと感謝を長歌に詠んでいる。仕事を愛し長年にわたって勤め上げ、安定した治世が実現できたことを喜ぶ正敦の心情にもじみ出ているように思われる。

職を辞せし時の歌并短歌 正敦

おさまれる御代のひさ堅の雲井なす、あふぐも高き我君の、みことかしこみ御はかせを、てづから賜ふおほみこと、何といはねの下草も、もえ出る春の心地して、空を仰ぎつぬかづきつ、朽残りたる老が身に、恵の露のかけまくも、あやにかしこきあふせごと、かうぶることの嬉しさは、みじかき筆に尽されず、深き流の水茎も、いかで及ばむ幾度か、思ひ出つゝ朝な夕な、この世を忍ぶおもひ出にせむ

国立公文書館蔵



○正敦の晩年と墓所

正敦は天保三年（一八三二）一月二十二日、辞職を願い出た。許可が出たのは早くも同月二十九日、かつて「吹毛の刃」と称され、再三の辞職願

も許されなかった正敦だが、晩年はかなり老衰が進んだようである。堀田老侯は四十年余も若年寄を勤めたが、年老いて歩行も難渋し、記憶も衰えたからと、この春隠退を願い出て、首尾よく願いが聞き届けられた。退職の日は、特別の思召しで將軍御手づから御脇指を下された。これほど長らく精勤した若年寄はいないなどと世人は言い合っていた。御脇差を賜うことは重々しいことで、たやすいことではない。將軍の格別のご恩寵だという評判である。『甲子夜話』とある。ちなみに、晩年の書跡から、脳軟化症を患っていたとも言われている。

辞職後、官邸から麻布広尾の邸に移り住み、惣髪して水月と称した。嫡子の正衡に家督を譲り一万六千石を継がせたが、辞職から半年も経ない六月十九日（十六日とも）に没した。数え七十六歳。諡号は「報国院水月無染大居士」。江戸渋谷（現・渋谷区広尾）香林院（族譜稿には渋谷祥雲寺中景德院とする）に葬られたが、その後、墓は昭和三十年代に青山墓地に移されたという。現在、青山霊園内にある大名墓の中には堀田家の墓は見当たらない。整理されて現代風の墓石になっているともいわれる。広大な青山霊園で堀田家の墓所を探すのは困難であるが、もし墓石に家紋が彫ってあるとしたら手がかりにはなるだろう。堀田家の紋は「丸に堅木瓜」、世に「堀田木瓜」と称されている縦長の紋である。



堀田木瓜

【参考】◇堀田正敦の出生年について◇

堀田正敦は通常、「宝暦五年に仙台藩主伊達宗村の八男（六男とも）として生まれた」とされる。例をあげれば菊田定郷編『仙台人名大辞書』は伊達氏の「族譜」「族譜稿」「東藩史稿」を参照のうえ、「宝暦五年七月廿日仙台南に生る、宗村公の第六子」としている。また徳川幕府の『続徳川実記』も「陸奥国松平伊達宗村が八男」天保三年「六月十九日七十六歳にしてうせぬ」とあり、逆算すると宝暦五年生まれとなる。

※宝暦五年（一七五五）七月に生まれ、天保三年（一八三二）六月に死去したので、数え年七十七歳に一ヶ月とどかず、七十六歳となる。

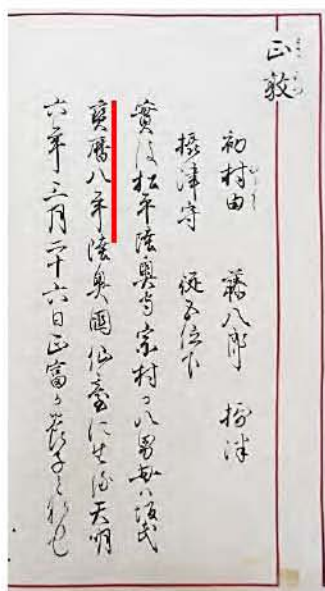
しかしながら、正敦が自ら編纂した『寛政重修諸家譜』には「松平陸奥守宗村が八男」「宝暦八年陸奥国仙台南に生る」と明確に記述されている（資料①）。吉川弘文館『国史大辞典』もこれに拠って「陸奥仙台南藩主伊達宗村の八男」「宝暦八年（一七五八）生まれる」としている。

江戸時代には実際の出生年と違う届出がされることはよくあることだった。しかし、ここで問題になるのは、もし正敦が宝暦八年生まれだとすると、「伊達宗村の八男」とすることに矛盾が生じることである。宗村は、宝暦六年五月に死去しているからである。

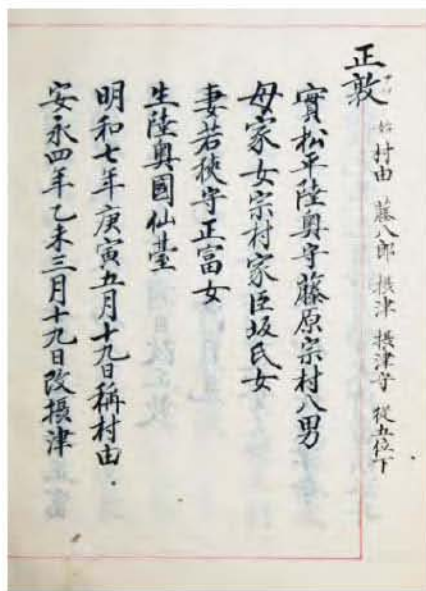
あるいは、考え難いことではあるが、編纂時に書き間違えた可能性もある。そこで堀田家が幕府に提出した『寛政重修諸家譜』呈譜の控を見ると、なぜか出生年が書かれていない。呈譜の資料となつた『堀田家系譜』（資料②）も控と同内容で、やはり出生年がない。藩主の経歴は出生年が必記事項だが、正敦の出生年は系譜に記録されず、幕府

にも提出されなかったようである。では『寛政重修諸家譜』の編纂者は何を根拠に「宝暦八年」と記述したのだろうか。あるいは正敦の指示があったのだろうか。『寛政重修諸家譜』は事実確認を慎重に行いつつ編纂されたといわれる。その総裁であつた正敦自身の生年が「宝暦八年」と記述されている事実を軽視すべきではないと思う。そこに正敦の何らかの意思が込められているようにも思えるからである。（了）

資料①『寛政重修諸家譜』原本 国立公文書館蔵



資料②『堀田家系譜』 佐野市郷土博物館提供



【参考文献】

- 『続徳川実記』『国史大事典』 吉川弘文館
- 『寛政重修諸家譜』 続群書類従完成会
- 『伊能忠敬 測量日記』 佐久間達夫 大空社
- 『仙台人名大辞書』 宝文社
- 『宮城県人物誌』 今泉・宇野 歴史図書社
- 『仙台市史』 通史編5近世3別編2 仙台市
- 『佐野市史』 佐野市史編纂委員会 佐野市
- 『随筆百花苑』 八巻・九巻 中央公論社
- 『甲子夜話』 松浦静山 東洋文庫 平凡社
- 『宇下人言』 松平定信 松平定晴
- 『むかしばなし』 只野真葛 東洋文庫 平凡社
- 『伊能忠敬』 大谷亮吉 岩波書店
- 『伊能忠敬』 小島一仁 三省堂選書 三省堂
- 『故従五位下堀田攝津守正敦公御履歴』 舊果会
- 『堀田氏と佐野領』 佐野市郷土博物館
- 『鳥の殿さま 佐野藩主 堀田正敦』 "
- 『松前紀行』『閑之末日記』 仙台叢書刊行会
- 『伊達世臣家譜』 "
- 『堀田正敦の『観文禽譜』』 鈴木道男 東北大
- 『江戸鳥類大図鑑』 堀田正敦 鈴木道男 平凡社
- 『伊能忠敬未公開書簡集』 伊能忠敬研究会
- 『世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書』 "
- 『江戸時代史』 三上参次 講談社学術文庫
- 『江戸人物科学史』 金子務 中公新書
- 『江戸幕府の政治と人物』 村上直 同成社
- 『江戸幕府の日本地図』 川村博忠 吉川弘文館
- 『天文暦学諸家書簡集』 上原久編 講談社
- 『堅田藩の家臣と職掌』 郡山志保 堅田大庄屋
- 文書研究会 第三回報告会
- 『仙台藩の蝦夷地出兵と軍陣医学』 日本医学史

〈随想〉 秀蔵の返歌

伊能楯雄

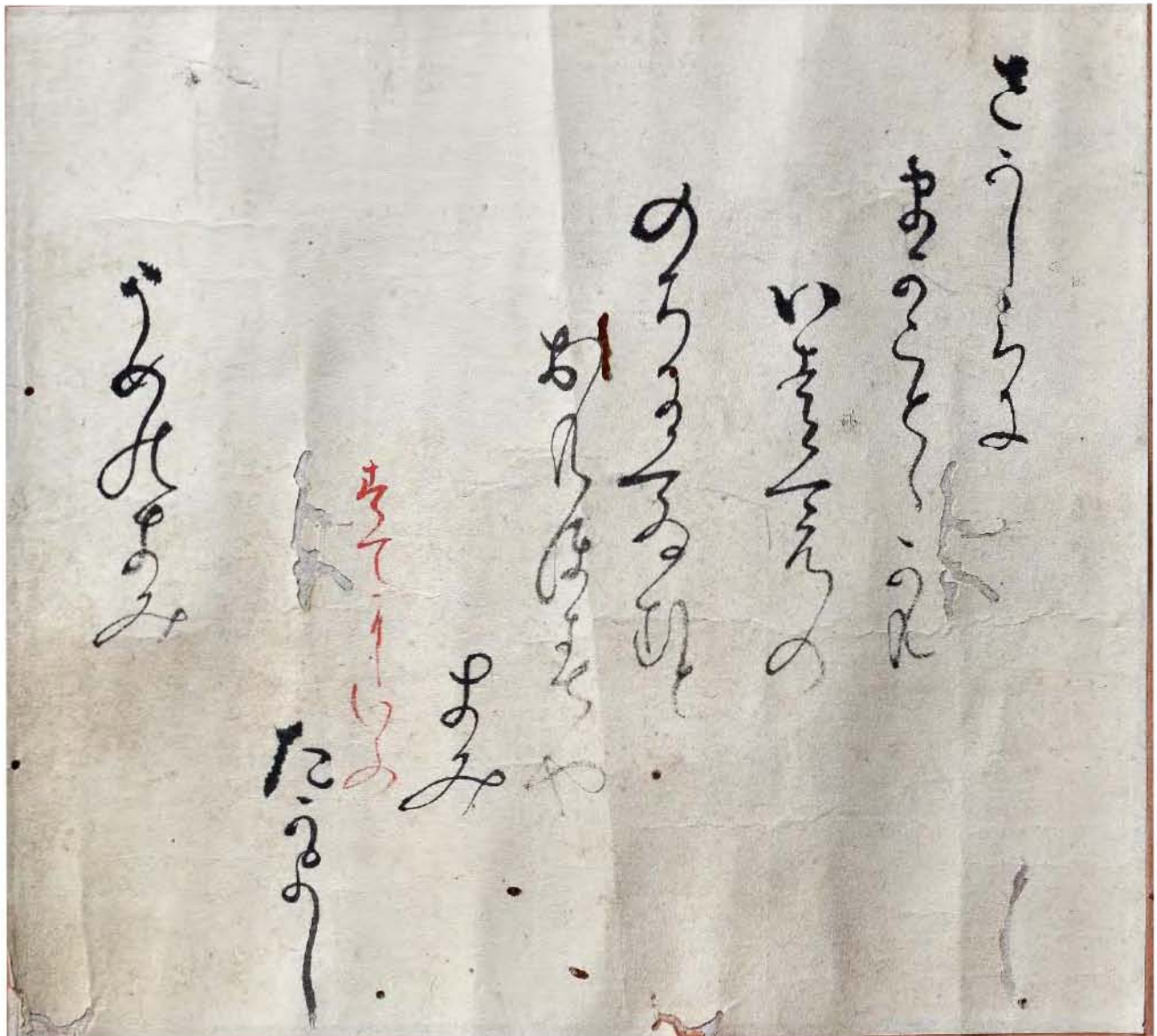
伊能忠敬の次男・秀蔵（別名 敬慎）の歌が我家に伝えられている。
一五センチメートル×一六センチメートルの料紙に、仮名のみの連綿体で書かれている。

さかしらに
まがこととかも
いはくへの
のちにくいむと
おもほすや
きみ
すてにいふ
たかよし
うめのきみ

この歌は、秀蔵を気遣う「うめのきみ」なる人への秀蔵の返歌だと想える。

利口ぶって

（あのことは） 禍事だったのではなどと
（いはくえ：悔いにかかる枕詞）
いまになって後悔しているのではないかと
お思いですか（そのようなことはありません）



秀蔵の和歌（自筆文書の写真・ほぼ原寸大）なかなかの達筆ぶりである。

(すでにいふ…はつきりと申しあげます)
たかよし(敬 慎)
うめのきみ

このような意味合いであろうが、いったい「まがごと」とは何を言っているのであろう。

文化十二年四月二十七日、(第九次)伊豆八丈測量の一行が出立する日のこと。秀蔵は、忠敬から看病、留守居のため家に残るよう命じられたのだが、近所まで送っていくと言いおいて、尾形謙治や伊能七左衛門等とともに品川まで出かけてしまう。謙治等は夕刻四時頃帰ったが、秀蔵ひとり夜中の十二時頃、願酒を破り酔って帰宅、詫びの言葉もなく寝入ってしまった。



文治梅の由来

鳳後(勝次郎)の歌碑
潮来市・長勝寺

翌日、忠敬は、「これまでも度々論してきたが、謝りの一言も改めの一言もない。このような不法不埒は許さない」と、秀蔵を追い払ってしまった。

さらに、忠敬は、佐原の妙薫へ手紙を送り

「右悪者追払無人二候得共 日々安心致し候御地へ下向等ハ有之間敷候得共万々一下向候共家内へ入候儀ハ御無用二候」と、佐原本家とも縁を切らせた。秀蔵は勘当された。この時、秀蔵二十六才である。

さて、「まがごと」が、この一件だとすると、秀蔵は、追い払われたことを後悔していなかったということになる。さらには、いずれ忠敬の元を離れなければならぬと考えていたのではないかとも思える。

この数日後、桑原隆朝宅を訪れた秀蔵は、ここに置いてほしいと頼みこんだが、亀島に戻りたいとも、又、過ちを改める言葉もなかったという。隆朝は忠敬の考えを聞いたうえで、その頼みを断り、その後秀蔵は姿を消した。

秀蔵は、忠敬の次男として生まれたが庶子であり、亡き正妻の子で二〇才年上の長男景敬が、伊能家を引継いでいた。

秀蔵十五才のとき、父忠敬の供をして(第一次)蝦夷地測量に同行する。五才年上の従兄弟・平山宗平もいっしょである。続いて、第二次からは宗平の兄郡蔵も加わり、第三次・第四次には宗平に代わり同年の尾形慶助が加わった。皆よく忠敬を助けた。第一次から第四次まで四力年間の成果は、「日本東半部沿海全図」として完成、享和四年九月、將軍家齊公の閲覧するところとなった。忠敬は十人扶持を仰せ付けられた。

第五次測量の途上、忠敬が病氣により隊を離れていた際のこと、弟子たちの間に、追々気が緩み御用を權威に不取締りの行為があった。藩主から、このことを伝え聞いた天文方高橋景保から忠敬に對し訓戒書がとどけられた。この一件の始末は、内弟子に對し厳しいものとなった。郡蔵は破門、秀蔵、門倉、尾形は謹慎とされた。

文化五年、第六次では、天文方に氣遣つてか、稲生秀蔵として加えられたが、途中大阪にて病氣のため佐原村へ歸された。そして以降秀蔵が測量隊に加えられることはなかった。

文化八年十一月、第八次(九州第二次)測量を前にし、忠敬は秀蔵を桜井家へ婿養子に出した。二年半に及ぶ第八次測量中、江戸に住む(桜井)秀蔵は、深川宅の管理や八丁堀亀島辺へ転居するための手筈を任されていた。

文化十一年五月二十二日、忠敬帰府、十日後の六月三日亀島(桑原隆朝邸跡)の新居に移ることができた。

十一月二十八日、秀蔵が亀島の家に引き移ってくる。(桜井家を離縁になつてのこと、桜井家での生活わずか三ヶ年余であった。)しかし、亀島での秀蔵の仕事は、忠敬の身の回りの世話など内向きのことに限られ、御用向きのことは年下の箱田良助や保木敬蔵が担っていた。

翌年四月の第九次(伊豆八丈測量に際しても、秀蔵は留守居役、せめて品川までもと測量隊に同道した。そして前述したように、勘当の身となつてしまった。

次に、この返歌の受け手である「うめのきみ」についてである。想像するに、この人物は、分家の伊能七郎右衛門豊秋(忠敬入婿時の伊能家の後見

人)の長男・勝次郎(別名 忠闇、鳳後)であろうと考える。秀蔵より二十七才年長、父豊秋死後、家を継ぐが、俳句や和歌に没頭するようになり、家事を顧みなかったため、三十一才の時に追放され久離人の身となった。やがて、妻の実家のある潮来村に草庵を構え自適な生活を送る傍ら、弟子たちに和歌や俳句作りを指導するようになっていた。潮来村の古刹・長勝寺には、本堂前の源頼朝公お手植えと伝えられる梅の古木に並んで彼の句碑が立っている。弟子たちによって建てられたものであるが、鳳後(勝次郎)自ら選句し揮毫したのであろう。

この花や

そも鎌倉の鐘の銘

鳳後

(文化十一年戊午仲冬 筆弟建)

少年時代の秀蔵は、父豊秋とともに本家の伊能家に入りしていた勝次郎とは面識があったはずである。二十六才になったばかりで伊能家との縁を切られ行き場のなかった秀蔵が、潮来の草庵に住む久離人・勝次郎(ここでは「鳳後」と名乗っていた)の元を訪ねたのではないだろうか。今や同様の身の上の二人である。秀蔵にとつての「うめのきみ」は、「この梅や」の句の勝次郎であると思う。

また、秀蔵の歌の書かれたこの料紙が、忠敬が秀蔵に宛てた書簡四通とともに、勝次郎の子孫である伊能七郎右衛門家に伝えられていることを考えると、この歌は勝次郎に送られたものとして間違いないさそうである。

併せて、父忠敬の書簡をも託したことを思うと、歌の終わりに朱書きで付加されている「すでにいふ」という文字に、秀蔵の決意が込められているように思える。

さて、この歌がいつ頃のものなのかは判断できないが、勝次郎の気遣いへの返歌とすれば、勘当されて(文化十二年)間もない頃とみてよいであろう。

秀蔵のその後の消息は、不明であるが、九年後の文政七年、神保玄次郎と改名した秀蔵が、佐原に下り、数日滞在の後江戸に帰ったことが確認される(忠誨の日記)。その後いつの頃か、佐原に戻り村人に書や算術を教え暮らし、天保九年、五十四歳で死去した。二十六才で父忠敬と離別した秀蔵であるが、その墓は佐原・観福寺にある忠敬



忠敬と秀蔵(神保玄次郎)の墓
佐原・観福寺



の墓から五メートル程の場所に建てられている。十五才で父忠敬に同行した蝦夷地測量(第一次)以来の秀蔵のことを思い、また、同年代でありかつて共に歩んだ尾形謙二郎(後に天文方手付下役や箱田良助(後に勘定方)と比べると、その後の人生は、やはり不運である。本人の身からでた錆なのか、忠敬の厳格な気性によるものなのか、いずれにせよ秀蔵が気の毒に思えるのである。

〈余談〉

「敬慎」(たかよし)とは、忠敬が名付けたのか、勘当されて後、秀蔵自ら名乗ったのかは判らないが、「敬慎」とは、つつしみぶかいこと、また、「礼記」には「敬慎者仁之地也」とある。

秀蔵は本当の「敬慎」であったのか…と想った。

(終)

(筆者 伊能七郎右衛門家当代)



伊能氏氏舎

千葉県佐原市の小野川べりにある伊能忠敬旧宅

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十七回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第七次測量】（九州第一次）上鴨川村～深川黒江町 自 文化8年3月7日 至 文化8年5月9日

宿泊日 旧暦	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	天体観測	大図番号
7 *	（西暦） （29） 上鴨川村 支隊中食 大戸田村 【支隊】 淡河町	同 加東市 三木市 神戸市北区	本陣庄屋宇左衛門 百姓嘉右衛門 庄屋武右衛門 客家	社村より上鴨川村迄測る。恒星測定 三木上町より大戸田村迄測る。 大戸田村より淡河町迄測る。	一三六 一三六 一三六
8 *	支隊中食 （30） 上相野村 【支隊】 湯山町登町 三田本町	同 三田市 神戸市北区 三田市	庄屋藤兵衛 百姓利兵衛 本陣兵衛治郎左衛門 庄屋川崎宇右衛門	淡河町より屏風村字辻迄測る。 屏風村字辻より西尾村字五社迄測る。 上相野村より福島村にて中食し三田本町迄測る。	一三六 一三六 一三六
9 *	【支隊】 （5） （1） 湯山町登町 三田本町	同 神戸市北区 三田市	本陣兵衛治郎左衛門 庄屋川崎宇右衛門 神田惣兵衛	湯山町追分より西尾村字五社迄測る。湯山町追分より登町を歴て鼓ヶ滝迄測る。登町より船坂村界白水川迄測る。 雨天逗留	一三六 一三六
10 *	【支隊】 （2） 湯山町登町 三田本町	同 神戸市北区 三田市	本陣兵衛治郎左衛門 庄屋川崎宇右衛門 神田惣兵衛	雨天逗留 三田本町より平田村三田街道追分を歴て上山口村迄測る。	一三六 一三六
11 *	中食 上山口村 湯山町登町 生瀬村大立川 支隊中食 小浜町	同 西宮市 神戸市北区 西宮市 宝塚市	年寄伝蔵 本陣兵衛治郎左衛門 庄屋川崎宇右衛門 泉屋治郎兵衛 脇本陣木下吉左衛門	上山口村より三木三田追分碑に繋ぐ。 船坂村界白水川より生瀬村大立川迄測る。 生瀬村大立川より武庫川を渡り安倉村枝東口追分迄測る。	一三六 一三六 一三六
12	（4） 中山寺村 多田院村 池田本町 支隊休 池田本町 【支隊】 瀬川村 中食 大山崎	同 宝塚市 川西市 大阪府池田市 池田市 箕面市 同 京都府京都市	中山寺坊中宝蔵院 庄屋旗兵衛 大和屋大三郎 大和屋大三郎 梶山市三郎 高槻屋五兵衛 金屋長兵衛 新庄屋九右衛門	支隊、安倉村枝東口追分より大鹿村追分迄測る。枝東口追分より中山寺村仁王門前を歴て中筋村迄測る。本隊、湯山町より無測にて中山寺へ着。 中山寺村より満願寺境内を歴て猪名川を渡り多田院村迄測る。 多田社（源満仲公神社）へ参詣。無測 多田院村より池田本町迄測る。 池田本町より瀬川村追分迄測る。 下川辺外三名総持寺へ立寄。	一三六 一三三 一三三 一三三 一三三 一三三
14	（6） 伏見上油掛町	京都府京都市	無測	無測	一三三

2 4		2 3	2 2		2 1 *			2 0 *			1 9 *		1 8	1 7		1 6	1 5	宿泊日・旧暦				
(1 6)	中 食	(1 5)	(1 4)	休 中 食	【支 隊】	支 隊 中 食	(1 3)	【支 隊】	支 隊 中 食	(1 2)	【支 隊】	(1 1)	中 食	(1 0)	中 食	(9)	中 休	(8)	中 休	(7)	昼 休	(西 暦)
平針村	川名村	同	名古屋城下 玉屋町	名古屋城下鉄砲塚町	名古屋城下玉屋町	井口村枝四ツ家	小牧宿下町	一ノ宮村	黒田村	犬山城下横町	加納宿	鶴沼宿	各務原更木新田	美江寺宿	赤坂宿	柏原宿	番場宿	愛知川宿	武佐宿	草津宿	大津宿	宿泊地
同 名古屋市中 天白区	同 名古屋市中 昭和区	同	同 名古屋市中 中区	同 名古屋市中 東区相生町	同 名古屋市中 中区	同 稲沢市	同 小牧市	同 一宮市	同 一宮市	同 愛知県犬山市	同 岐阜市	同 各務原市	同 各務原市	同 岐阜県瑞穂市	同 大垣市	同 米原市	同 米原市	同 愛荘町	同 近江八幡市	同 草津市	同 滋賀県大津市	現・市町村名
本陣百姓伝兵衛 平左衛門	曹洞宗護邦山太平寺	同	岡山金治 美濃屋儀右衛門	永楽屋伝左衛門	岡山金治 美濃屋儀右衛門	庄屋常右衛門	本陣江崎善右衛門	酒屋勘右衛門	庄屋常右衛門	島屋与八	本陣松波藤右衛門	桜井岡右衛門	茶屋いろは屋源治	本陣山本宇兵衛	本陣矢橋幸助	本陣南部辰右衛門	本陣市川長右衛門	本陣西沢基五左衛門	本陣下川和五治	本陣田中七郎左衛門	本陣肥前屋弥四郎	宿泊宅
川名村より八事村（此村に古義真言宗八事山興正寺境内広し）を歴て平針村迄測る。恒星測定																						
雨天逗留																						
名古屋城下鉄砲塚町より富田町制札前四ツ辻迄測る。																						
小牧宿より大曾弥村を歴て名古屋城下鉄砲塚町迄測る。																						
無測																						
一ノ宮村中町より井口村枝四ツ家、起街道一里塚に繋測る。																						
羽黒村より小牧宿下町迄測る。小牧山打上げ恒星測定																						
黒田村より一ノ宮村中町迄測る。																						
加納八幡町追分より笠松村徳田新田を歴て木曾川（測遠術にて求む）を渡り黒田村迄測る。																						
鶴沼宿より木曾川を渡り犬山城下横町を歴て羽黒村迄測る。恒星測定																						
無測。一同薩州野元嘉三治に出会う																						
無測。恒星測定																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測。京都御門跡遠着にて諸国参詣人多し。																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						
無測																						

文化8年4月										宿泊日・旧暦
(1811)										(西暦)
										宿泊地
										現・市町村名
										宿泊宅
										天体観測
										大図番号

21		20*			19*		18*		17*		16*		15*		14			13		宿泊日・旧暦
(11)		【支隊】 支隊中食 (10)			【支隊】 支隊中食 (9)		【支隊】 (8)		【支隊】 (7)		【支隊】 (6)		【支隊】 (5)		(4)			(3)		(西暦)
台ヶ原宿		教来石宿			新倉村		平出村		御堂垣外駅		松島宿		高遠城下		伊奈部駅			飯島村飯島町		宿泊地
同		山梨県北杜市			岡谷市		辰野町		伊那市		伊那市		伊那市		伊那市			飯島町		現・市町村名
本陣小松伝右衛門 柏屋平右衛門 牛丸屋弥源治		問屋河西六郎兵衛			本陣白川嘉右衛門		問屋重左衛門		本陣庄屋八左衛門 孫七		問屋与兵衛		客館 亭主分池田庄太郎		本陣問屋弥治兵衛 年寄源助 年寄喜左衛門			本陣年番名主所兵衛 右衛門 惣兵衛		宿泊宅
着。教来石宿より台ヶ原宿迄測る。支隊は金沢宿より無測にて		教来石宿迄測る。			金沢宿より無測花園村より乗船		雨天逗留		雨天逗留		雨天逗留		雨天逗留		伊奈部駅より山寺村内御前瀬を歴て松島宿迄測る。			忠敬外五名、無測量にて飯島町着。支隊、大島町より本郷 村字沓掛を歴て飯島村飯島町迄測る。恒星測定		天体観測
九八		九八			九六		九六		九六		一〇八		一〇八		一〇八			一〇八		大図番号

2 *		1		文化8年5月	
【支隊】	(22)	(6, 21)	後手中食 先手中食	駒飼宿 黒野田駅	山梨県甲州市
犬目駅	猿橋駅	中初狩宿	本陣源右衛門	本陣中屋半兵衛	勝沼駅より鶴瀬宿、御関所を歴て駒飼宿迄測る。
同	同	同	中富屋久兵衛	本陣天野屋八左衛門	笹子峠より黒野田駅迄測る。
同	同	同	本陣奈良奥右衛門	本陣藤左衛門	後手、駒飼宿より笹子峠に繋測。先手、黒野田駅より中初狩宿迄測る。
同	同	同	本陣源右衛門	本陣奈良奥右衛門	中初狩宿より桂川を渡り大月村、富士街道追分迄測る。無測にて猿橋駅へ着。
同	同	同	本陣源右衛門	本陣奈良奥右衛門	大月村、富士街道追分より大月駅を歴て猿橋村猿橋を渡り上鳥沢村御霊橋迄測る。無測にて犬目駅へ着。
九七	九七	九七	九七	九七	九七

30	29 *	28	27	26	25	24	23 *	22	宿泊日・旧暦
(20)	【支隊】 (19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(西暦)
勝沼駅	石和宿	府中(甲府)城下	府中(甲府)城下	歟沢駅	下山駅	歟沢駅	甲府柳町二丁目	韮崎宿(河原部村)	宿泊地
同	同	同	同	同	同	同	同	同	現・市町村名
甲州市	笛吹市	同	甲府市	歟沢町	身延町	富士川町	甲府市	韮崎市	宿泊宅
本陣組頭幸蔵 組頭縫右衛門 鍛冶屋孫兵衛	福田屋安右衛門	同	本陣太左衛門 弥五左衛門	問屋喜平治 百姓代清左衛門	本陣百姓九左衛門 六郎右衛門 長百姓太郎左衛門 本陣名主問屋兼帯 弥一右衛門	本陣名主問屋兼帯 弥一右衛門 問屋喜平治 百姓代清左衛門	本陣太左衛門 弥五左衛門	本陣問屋兵助 富屋弥右衛門 若竹屋文蔵	天体観測
酒折村より笛吹川を渡り石和宿を歴て富士追分迄測る。 忠敬、坂部は直に勝沼宿へ行。富士追分より川中島村、一宮追分を歴て日川を渡り栗原村を歴て勝沼駅迄測る。川中島村、一宮追分より末木村一宮浅間神社前迄測る。	忠敬外五名逗留。恒星測定	逗留測。上飯田村入口より身延山街道追分及び江戸街道柳町二丁目を経て酒折村迄測る。ほか時宗稲久山一連寺、一向宗東派化竜山光沢寺、大手前、臨濟宗瑞雲山長禅寺、臨濟宗定林山能成寺を測る。	無測	下山駅より早川を渡り西島村字一町畑を歴て富士川を渡り歟沢駅迄測る。	富士川乗船波木井村へ着。無測にて身延山妙法華院久延寺に至る。一同に諸堂本房一覽。忠敬外三名奥院へ登山し測る。坂部外五名、身延山門前より下山駅迄測る。恒星測定	東南胡村より浅原村釜無川にて別手と会測。恒星測定	韮崎宿より塩川及び荒川を渡り上飯田村入口界迄測る。	台ヶ原宿より尾白川及び釜無川を渡り穴山村境を経て韮崎宿を過ぎ身延道追分迄測る。	大図番号
九七	九七	九八	九八	九八	一〇〇	九八	九八	九八	

9	8	7	6		5	4		3	宿泊日・旧暦
(29)	(28)	(27)	(26)	中食	(25)	(24)	中食	(23)	(西暦)
深川黒江町	内藤新宿	下高井戸宿	府中番場宿 (本町)	柴崎村字下和田	八王子横山宿	小仏駅	与瀬駅	上野原駅	宿泊地
同 江東区	同 新宿区	同 杉並区	同 府中市	同 立川市	同 八王子市	東京都八王子市	神奈川県相模原市 緑区	同 上野原市	現・市町村名
忠敬隠居宅	涼野屋長七	本陣玉屋吉右衛門 角屋伊左衛門 名主又右衛門	本陣高橋三郎右衛門 松屋忠治郎 島屋鉄五郎	年寄元右衛門	本陣川口七郎兵衛 鯛屋勘治	米屋平助 問屋藤左衛門 青木屋半兵衛	脇本陣岡本覚五郎	本陣角屋乙助 伊勢屋源右衛門 奈良屋森右衛門	宿泊宅
日記記入無	下高井戸宿より内藤新宿上町、青梅街道追分を歴て内藤新宿を過ぎ四ツ谷大木戸迄測る。	府中本町より下布田村を歴て下高井戸宿迄測る。	字下和田より府中番場宿迄測る。	後手、八王子新町限より日野宿を歴て一ノ宮社迄測る。先手、日野宿より玉川を渡り柴崎村字下和田迄測る。	後手、小仏駅より上長房字新井、高尾山追分を歴て日小仏御関所を通り日光街道追分、相州川越追分を歴て八王子横山宿を過ぎ新町限迄測る。先手、無測にて上栢田村へ行、高尾山有喜寺中門より高尾山追分迄繋ぐ。	与瀬駅より中峠、小仏峠を歴て小仏駅迄測る。恒星測定	上野原駅より字諏訪、境川御番所を歴て吉野村小猿橋を渡り上野原迄測る。	上鳥沢村御霊橋より犬目駅、野田尻駅を歴て鶴川を渡り上野原迄測る。	天体観測
九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九七	九七	大図番号

多度津藩勘定方日記より幕府測量方関係記事を抜粋

(一)

編集部より

かなり以前になるが、伊能ウオークに関連して地域史料を調べていたころ、機会があつて多度津の図書館を訪問した。伊能関係の地元史料の有無を尋ねたところ、係員の方が大変親切に対応していただき、解読された本史料を見せていただいた。

コピーをお願いしたところ、複製して送つてあげましょう、といわれ受領したのが本資料である。その後、矢継ぎばやの各企画にとりまぎれて下積みになってしまい、誠に申し訳ない結果である。

データ化しなければ、と思いつつも時間がたつてしまったのは慙愧の至りである。そんななかで、会員の中村泰子氏に出会つて膨大な内容をデータ化したのが本史料である。

中味については、以下に記すように柴田勅夫氏の労作である。関係者の目にとまり次の世代に引き継ぐ必要を痛感して、解説も不十分なが、あえて掲載することにした。忠敬先生没後二百年行事としての伊能測量協力者顕彰会などの指令塔としての業務多端のなかにつき、お許しをお願いしたい。

日記はお正月の殿様への賀詞言上から始まるが、多度津藩領の伊能測量に直接関係し、他の地域と多少の違いがみられる部分のみを抜き出して紹介する。

(渡辺一郎)

原解読者のまえがき

香川県立図書館収蔵の旧多度津藩関係文書のうち、文化五辰年勘定方日記 上(自正月閏六月)下(自七月至極月) 二冊には幕府天文方伊能忠敬及び坂部貞兵衛一行十六名による沿岸測量に関する記事が詳細筆録されている。

従来 伊能忠敬一行の測量についての記録としては、高松藩に関しては「鎌田郷土博物館所蔵久米榮左衛門関係古文書 及び 上野瀬平「海岸測量日記」(山田本) 又 丸亀・多度津藩については多度津町武田季雄氏及び山路弘道氏所蔵の大庄屋乃至庄屋の記録」が有名であったが、準備のための書類或は一役職のものとかで、脈絡一貫するものに欠けていた。

然るに本日記は天文方一行の一切の取扱について終始を明らかにするに止まらず、上述諸記録の連結(つながり)を解明することに甚だ大いなるべく、このため小生の浅学を顧みず関係部分を抄出し、読取を行った次第である。

茲に坂出鎌田郷土博物館員藤田一郎先生 亦小生の微志に深く同情の念を懷かれ、御繁忙の裡を全文に亘り逐一御校閲、御加筆の労を厭はれず、深甚なる謝意を表すものである。

尚、両冊共蟲蝕の害甚だしく殊に上巻には冊子の下部数種が欠落したる有様にて、欠字部が遺憾乍ら数多く真に残念である。

昭和五十一年十一月十一日

柴田勅夫

多度津

文化五辰年日記

勘定方

三月

一 表御郡方左之通

然者測量之儀二付阿州表顔

役中方 別紙写之通 被申

越候二付差進入御被見申候

尤着坂日限等 被承合口

睨と者 不致候得共 去月廿日頃

可有之哉之旨尚又彼地二而両

三日も逗留可有之様子ニ口

候由 尚淡州表到着之上

順行之次第 相変候義も

有之候ハ、早、可被申越旨、申

来候間 此段御承知可被成

右為可得御意如此候已上

三月四日

西田三橋

神村 小倉 勝田様

天文測量方御役人被罷越候

節取扱向大綱

一 御役人上下人数左之通相聞候

伊能勘解由

下役同心

坂部貞兵衛

同

下河部政五郎

同

青木勝二郎

同

柴山傳左衛門

外二勘解由召連 家来□

内弟子之者右へ 相籠り

有之候由 都合上下拾六人

一 右御役人被罷越候節 拙者共之内

老入国内入込候 初而之於止宿

一應及 挨拶先、之義者 □□

下役之内老兩人附添申候事

(渡辺注、以下同じ) 拙者共の内一人とは、多度津領に入境の際、勘定方から、一人挨拶にでるとの意味か。

一 大庄屋 井 村浦役人共羽織袴

又は立附等二而村境江出迎申候事

一 旅宿可成又一軒二相配呉候様

二と 御望ニ付大鉢者間廣之□

相配候得共間狭之處者二三軒

二も 相配候事

但し 障子 襖 壁 疊等相□

取繕申候得共大ニ不見苦

者其儘相用申候

一 熨斗三方指出候事

一 御朱印臺用意仕候事

(注) 忠敬が所持するのは、御証文であつて

御朱印状ではないが、床の間に置き場が用意された。他の史料によるとお証文箱は施錠されており金庫の役割も兼ねていたらしい。

一 休泊共盛砂銚手桶指出

門前へ者花輪透印附雪

洞指掛 玄関前へは 宿定紋(カ)

付雪洞差出し候事

一 湯殿雪隠有懸り相用

若又無之處者 葭簀等二而

仮二用意申附候事

一 夜具之義 惣而 新規木綿

夜具用意申附候事

(注) 上分と下分に差をつけたところが多いが、

ここでは差を無くし、木綿で新調としている。

一つの見識か。

一 宿主 麻上下二而 門前迄迎

送仕申候事

(注) 宿亭主の出迎えは、町入り口、宿場口、船付

き場と指定されることが多いが、ここでは門

前でいいとされた。

一 賄之義 上分老汁三葉下分

一汁一菜 相居置 尤魚類

自由之場所二而者一二菜

之義者臨時之取斗いたし
茶くわし等指出し候事

但し国内入込之初而之止宿

二而者二三種二而酒 指出

其後之義 者有合□

珍敷品有之場所二而ハ

手輕差出し候積り二御座候

(注) 藩が替われば国が替わったと同じこと。食事

に上下をつけなかったところが多いが、ここでは上分一汁三菜、下分一汁一菜と明白に差をつけている。一方で、魚が自由なところは適宜に。入領の初日は料理を増やし酒も出せ、

という。手輕な珍品があれば出すようにともある。

要するに何でもできるのである。ここは藩の基本的な考えを示したもので、近隣と見比べて庄屋レベルでうまくやれ、ということのようである。

一 逗留中 旅宿近邊火之廻り

郷役人共之内申付候事

一 灘内屈曲之大綱丁数等

荒増 絵図面入用之趣□

指出可申 事

一 測量道筋人家相離□

小休所仮二用意申付 野風呂

等二而茶差出申候夏

(注) 失火の警戒、略図の提出、休み所の小屋がけ

等は何処でもおこなわれた。野風呂はお風呂

の形をした、小型の野外用湯わかし。

(注) 測量用品の用意が具体的なところに注意して欲しい。駕籠は乗用だけでなく、救急車、貴重品運搬もかねていた。

(注) 測量場所は天測場所のこと。木銭は宿泊料、他に米代をその場所の相場で一人一日五合分払った。忠敬持参の帳面に村方が受領印をおすようにしていたという。

一 測量手伝人足 事馴候□
人物相選拾人斗差出可申

一 諸荷物送り人馬百人斗用意
申付候事

一 測量之砌道筋村浦 高

家数 人数等 □□□ニ、□
案文を以相好之由於当□
同所相好候ハ、差出積ニ候□

一 宿々ニ而夜分測量砌十坪斗
之明地入用之旨ニ付 場所相
撰紋附幕 差出可申候事

一 国内嶋々取渡候節は浦船
用意、申付候事

一 測量道具左之品々入用之
趣ニ付用意申付候事

杭木 九本
内五本者 長三四尺
内四本者 長壹間余

壹尺廻り位

懸矢

ほんでん 八本

内六本者 長六尺位

内式本者 長壹丈位

一 駕式三挺用意申付候事

一 測量之砌 執筆手傳いたし
呉候様 御話しニ付処役人共
差出申候事

一 郡境村境之印 木杭建□

一 海岸通行ニ付而者 細道
二而も附出可申右取繕も
不相調用之場所者浦船
用意申付候

(注) 海岸の細い道もはかられるから、難しいところ
ろは船を用意しておけという。

一 途中 測量場所へも毛氈
薄べり 野風呂 煙草盆
等用意申付候事

一 木銭相拂候ハ、受取せ可申
候事

一 測量路々分ニ手ニ而相成□
も可有御座由相聞申候

一 他領江船路被引移候砌は
関船、漕船を指出相送可申
候事

以上

他領に移りたいといわれた場合は、出発側の領主が船手配せよ、と幕府指示を受けていた
ので、関船(大型船)を用意し、曳航するた
めの漕ぎ舟の手配も指示している。
以下、船手配が続くが、測量方への手当かと
考え整理してみたが、最後に十六日、お女中
出船とあり、期日も、多度津測量は九月であ
つて時期があわない。姫君のお嫁入りでもあ
ろうか。藩を挙げた大船団である。参考とし
て残しておく。

三月十二日

一 左之通御船組帳 御切紙添来ル
元締弥兵衛へ相渡候

一 御召 日吉丸 御船組
御船頭 中西佐次兵衛

目附 丸岡清兵衛
楫取 石原善兵衛

大工

香川勘助

貝勘 □□

大鞍

加子 五拾式人

[illegible]

伊藤文八 下部老人 挟箱 老荷	香川伝太夫 笠井嘉右衛門 船橋運平 下部老人 荷物四箇	小川又治 吉田為之丞 森寛右衛門 御駕 式挺	小頭 上田 治 押之者 式人 御手廻 拾人 下部 老人	七拾石積 船頭 金平 増加子 □人	一町船 老艘 増加子 □人	小頭 中村伝左衛門 足輕 五人 下部 老人	小頭 飯田弟之助 小人 拾七人 下部 式人	六拾石積 一町船 老艘 船頭 卯兵衛 増加古 式人	御馬 式疋 荷物 四箇 仲間 五人 下部 老人
杏籠 式荷 御廐荷物 四箇	四拾石積 一町船 老艘 船頭 忠兵衛 増加子 式人	神村大助 駕 管 丹下 駕 近藤壽元 駕 船数 大小拾艘	内 三艘 閑船 小早 四艘 漕船小遣船 三艘 町船	船頭 加子 合 百六拾八人 内 式拾七人 御手人 百四拾老人 水夫	右之外二 七翼丸 御船頭 馬場清助 楫取 平□ 加子 式十九人	篠原為治 物書手代兼 平山勘平 小使 老人	一 小遣船 老艘 加子五人	一 来ル十六日 女中出船二付 船申付候様	

御用人中より申聞 元利左エ門江達ス
文化五年日記

辰四月分 勘定方

四月廿日 曇、夕天

表御郡方より左之通
御手紙得御意候 各様弥御堅固
可被成御勤奉珍重候 然者
為測量御用 天文方 御役人
淡島より阿弼へ被取移候由二而
同処 顔役中より別紙之通申
来候二付則来書共写 三□
入御披見申候 尤書紙□□
差出置候義二付 別紙御披□
御返却御座候様いたし□
此段旁為御意 若斯御座候
四月廿日 西田三橋
小倉勝田 殿

一筆致啓上候 各様愈御堅固
被成御勤珍重奉存候 然者天文方
御役人 此度淡島東西灘分 測
量相済候て 去月十六日当国撫
養岡崎村江渡海被致夫より巡
海岸測量有之 同月廿一日城下
表江着 同廿五日出立追々東南
筋海岸測量中之处 雨天 続
候共速取兼申義二御座候

御用、取扱向等省 随分□ □先達而及御文通外格別 相替品も無御座候 其内 右 御役人方先觸二相添書上帳 仕立方安文達有之順達及 差配申候定而追々貴国江も御 同様之御義と被相察候得共 先為御心得書上帳案文写 掛御目申候 右書上帳面案文 之内調子入組過 急々仕立も 難調ヶ条も相見候義二付淡効、 二おゐて 右訳相合 彼是 御役人江移合之上於当国□ させ相済候写別紙之通二御座候 為差義も無御座候得共御問 合二も可相成哉と奉存候二付□ 為可得御意如此御座候恐惶□□ 四月廿一日 アノ方 連名	小口帳書物綴 帳面上書 書上 何国何郡 何村 右上紙裏二朱二而認有之 半紙堅帳二而 成丈細字認候事 難読取 郡名 村名ハ仮名付候事 老郡限の老組限、一帳二認□□ 宣御座候 何之誰 領分 何国何郡何村 一 高 何千何百何拾何石何斗何升 一家数 何百何拾軒 内 何百軒 本村 何拾軒 枝郷字何 一 村長 東西何拾何町 南北何拾何町 何拾何町 居村 内 何拾何町 野間 一 村内海邊長 何拾何町何拾間 但し 何村境 方 何村境 迄 一 居村方海道迄何町 若 居村海邊に候ハ、居村 海邊通に御座候と認 若 本村海邊方引込候か、枝郷 斗引込候ハ、其訳を認 当村方隣村何村家居込方角 何□何町 其間田畑か 山越しか 御朱印高 何拾石	一 寺 何ヶ寺 内 何宗何寺 何宗何庵 一 社 何 一 名所 何 一 旧趾 何 一 名産 何 一 古城趾 何山 誰古城 睨と不相別 誰古城と 伝へ候と認 一 遠山見渡 何山 方角 何元何里世餘 一 嶋 幾ッ 何嶋周 何拾何町 家数 何軒 何村方海上何町方角何 何嶋周 何町何拾軒 人家御座候 船掛湊 深何拾間 右之通相違無御座候 以上 年月日 何村庄屋 誰印
--	---	---

書上

阿波国板野郡

二重二相見へ候得共表方来候写之
通り其儘相認申候

土佐泊浦

阿波国板野郡

土佐泊浦

一 高 七拾九石三斗貳升九合
一 家数 貳百九拾五軒

三石村北境方

一 浦長 百七拾四町 但 同村南境迄

一 居浦海邊通二御座候

一 御朱印高無御座候

新祇大明神

一 社 三ヶ所

瓶浦大明神

王子大明神

一 名所 鳴門

一 旧跡 無御座候

一 古城跡 壺ヶ所 城主相知不申候

一 古戦場 無御座候

一 名産 無御座候

一 鍋島周廻 壺町参拾間

一 見渡 壺町三拾貳間

一 君嶋周廻 貳町四拾貳間

一 船懸湊深 七間余

一 遠山見渡 淡州沼嶋 己ノ方

一 凡 五里程

一 右之通相違無御座候已上

一 土佐泊浦庄屋

一 文化五辰年

一 弥兵衛 印

三月

同廿一日 天

一 塩木 松さき間川筋之義七分は松崎

有之趣申伝居候旨ニ承居候 村方ニ而

其通 相心得居候事哉得 承 □

見られ鳥渡画図ニいたし出候様被達候様是

代官中迄先日申置候処 左之通画図面差

出候事 但し朱ニ而出入ノ分は今日差配

口上ニ而 承り候を書入書、候事

文化五年日記

辰五月分

勘定方

同三日 天 無意儀

同四日 雨、夕晴

一 役所出仕

一 代官善助方左之書附出ル

口上覚

一 測量方御先觸写到来候趣□

別紙之通 御船手方御浦手

去る廿六日当組浦手 村々江御

達 御座候段申出候ニ付則右写

左之通

御先觸 壺通

御證文 三通

書上御案文 壺冊

余木村送り状 壺通

御船手御廻文 壺通

右之通差上申候 以上

五月三日

大塚周治

須藤九平太



御用先觸 測量方
覚

御證文

一人足 八人

一馬 同

一馬 七疋

同

一 長持 老棹持人足

右は我等共国々測量為御用

上下拾六人 淡州方測量相始メ

阿弐土弐豫州讃州込海邊浦々

嶋々其外最寄山々城下等

不殘相測量候ニ付御證文之通

書面と人馬無遲滯繼立且

嶋々有之場所又は海岸通行

難成場所は船用意致シ其外

止宿等差支無之様取斗可被

申候 尤右通行筋山川共致

測量候間村々絵図面持参

案内可有之候

一 通行筋村々領主姓名国郡

村名等別紙案文之通半紙

堅帳認前之泊迄持参可有之候

一 泊り宿之義雨天其外御用

調測量器御手入等二而逗留

いたし候ニ付途中方追々可達候尤

御測器据込候間南北見晴らし

地所十坪斗り用意可有之候

泊り宿二而夜分測量いたし候間

可成口上下不殘同宿積り

若村方建家間桝二而同宿

難成義も候ハ、近邊江別宿可有

之候 支度義は御定之木錢米代

相拂候間 其処有合之品二而一汁

一菜之外馳走ケ間鋪義可為無用

候則御證文寫三通相添差遣候

此先觸早々致順達讀込方播込

室津江繼送同所ニ留置我等到

着之節可被相返候 以上

辰三月四日

青木勝次郎

下河邊政五郎

柴山傳左衛門

坂部貞兵衛

伊能勘解由

淡州

阿州

土州

豫込

讃州

播州室津迄

右 国

海邊

浦

嶋

問屋

年寄

庄屋

組頭

中

覚

一人足 七人

一馬 老疋

長持 老棹

右者測量為御用測器類從

江戸東海道筋大阪淡路四国

海邊廻浦、并同所嶋々播磨

攝津河内大和伊賀伊勢国々

街道尾張木曾甲州両街道

往返共伊能勘解由断次第幾

度も可持送者也

辰正月

備前 印

右村宿中

人足老人馬六疋從江戸東海道

筋大阪淡路四国海邊廻浦并

同所嶋々播磨摂津河内大和

伊賀伊勢国々街道尾張木曾

甲弐両街道往返共測量御用

付 高橋作左衛門手附伊能勘解由

同下役坂部貞兵衛柴山伝左衛門

下河部政五郎 青木勝次郎 罷越二付

老人式疋 勘解由 老疋充 貞兵衛伝左衛門

政五郎勝次郎江取渡之者也

文化五辰正月

備前 印

右 村宿中

伊能勘解由義為測量御用
東海道筋大阪淡路四国海邊
廻浦井 同所嶋々播磨摂津
河内大和伊賀伊勢国々街道并
尾張木曾甲州両街道 往返
共於途中茂測量可致候間
其の先々二而差支無之様 尤地方
通行難成所ハ 其所方船を
出し 案内致無差支様可致者也
文化五辰正月

備前 印

宿々
村々年寄とも

書 上

(注) 書き上げ案文は省略する。備前は老中の長岡藩主牧野豊前守。この三つの文書は忠敬一行に、老中から与えられた御証文である。

覚

一 御證文之寫 三通

但し沓通ニは墨附沓ケ所有

一 御先觸 沓通

一 書上御案文 沓冊

但し、一紙ニ墨附沓ケ所有之候

右之通測量方御先觸到□

御立會之上御渡申候所相違無

御座候

以上

与州余木村庄屋

源八 印

文化五辰年 四月十九日辰之下刻
讃州養浦庄屋

小黒茂兵衛 殿

(注) 老中発給の御証文写しを添えた忠敬の先触れが、伊予の国境の庄屋から讃岐の庄屋に村継ぎで到着した。刻付けという至急報で、受信時刻が書かれている。大至急自分用の写しをつくり、隣村に伝達する。順達されて藩庁の勘定方に報告が上がる。

以廻文申達候然者 測量

先觸沓通 書上案文 沓通

御證文写 三通

別紙送り状之通 去ル十九日辰ノ

刻与州余木村方到来ニ付浦々

順達し刻積を以一昨廿二日子ノ刻

御供所浦方鶴足津江及順達候

ニ付則右写差越候間写取斗

合之義取斗可申 尚委細之

義は御郡御町方方も可申達候条

可得貴意候 以上

四月

戸祭嘉吉
篠原為治

浦手村々宛

五月

同 廿六日 曇

一 代官中々測量ニ付与州今治表方方開合

返事写出ル

貴札忝致拝見候如仰未得御意□□
候得共各様愈以御堅勝被成

珍重存候然者測量一件ニ付御聞

合候趣委細致承知候則先達而

於土州笹峯右御役方様□

申上候趣且其余□当方心得之

筋荒々別紙ニ相記入御覽

申候尤何連当国江御引移

御座候而も御領数之義ニ御座候ニ付

夫々御仕成萬端御隣領

相□義ニ付而は兼而治定

之義は難得御意候尚宇和嶋

邊御仕成致見聞候ハ、早速

微細ニ可得御意候間左様御承

知可被下其余萬々差懸リ承ル

義御座候ハ、是又為御知可得

御意 右御報迄 如此御座候恐惶頓首

五月廿三日 井川金左衛門

三好四郎兵衛様 丸岡小八郎様

覚

一 当地御入込之節御窺申上候処□□

一 七月時分と相心得候様被仰出候事

一 街道筋測量之義ハ無御座候

由土劔高知方川之江迄 街道

筋者四国中墨之為に測量

申成由其余街道ハ御測り不

被成趣ニ相聞申候

一 繪図面之義は海邊通り村

大体委敷相認メ海邊ニ不拘村□

地面被可致置尤海邊方□□□
ニ相成候山森林等者方角を□
書上ニ記置候事

大汐満際ニ而 見通しニ相成
所は凡式拾間三拾間又は
三間五間程ツ、隔杭を打

一番杭方ニ番杭江何之方
何分ニ当リ又ニ番杭方 其
次之杭へ 何之方何分、当ルト
順々ニ 相記置候事

御領分境並郡村境建杭之義
宇和嶋邊承合之上可相定は
心得居申候

名所旧跡之義は名所記ニ載セ
有之候分書出し其余相認不
申候事

御會敷之義土州表承合候所
御巡見様御同様之由御座候得共
何連当国御隣領之御振合
ニ准し可申心得ニ御座候

繩引人足之義は御一手先ニ付
八人程手当之事

繪図面取出之義は先□□
ニ致置於御隣領御伺申上候□□
書入可申心得ニ御座候

川之江方土笏境笹ヶ峯□□
之節山里之無差別凡式里斗
之处ニ而御止宿之手当可致様
仰出候事

御道筋道橋兼而取繕用意
可致心得ニ御座候

仮雪隠之義 御昼所其余御小休
等相構候場所ハ 上中下三ヶ所
斗リ拵候 心得ニ御座候
右之外相智候義も御座候ハ、
追而御通達可仕候

右両通求馬殿へ差出 夫々御聴書相濟
測量之義ニ付今治問合 返事も差上出候

病中目代願 岡田勘治
右願出 昨日長尾吾助方受取 今日
求馬殿江出ス

代官中方此度測量ニ付書上入用御領分
村々 御朱印高、高等此間問合有□□
去ル寛政元酉年御巡見之時分ニ差出候
扣 右一件写有之写取利左工門江相渡候

表紙殿(?)役手方来月 着之節□
申趣ニ而 看板式拾五枚借度旨申来候 故
元ノ利左工門方申出ル 取集用意之様
達置候

同廿八日 終日雨

五月□日 小倉勝田
西田三橋様

尚以御差越五通致返却候
間 御落手可被下候

此度 測量御用 公義御役人巡国之□
萬、此方御役方表御役方へ問合□
有之べくニ付 萬、無滞意 申談、□渡
度旨今日 求馬殿方 表御用番 佐々九郎
兵衛殿江 御意紙持参候由 被仰聞候ニ付
周藏義 三橋武太夫方罷越 右御頼も有之
□事ニ付 尚受無滞意 御申談 程度且つ
大庄屋 庄屋共方も其御方 顔役之者へ
何角問合等も可有之 申談候様 被達置
度旨被申述候事

此度測量 御役人参候ニ付麻御幕 五張
入用之处 宣鋪所式対ならては 無之ニ付
急ぎ 新規尅対申付、候様元ノ利左工門□
達候

多度津油屋熊藏安右衛門方 質銀ニ差支之
趣ニ而 銀八貫目ツ、拝借願候ニ付 此間
求馬殿へも 及御喃 御觸書ニ付 相渡候様
真鍋林治江 相達候

左之通 承置申候様、求馬殿方御差越有之
御手紙致啓上候 然者
公邊天文方 為測量御用ト罷越ニ付

御仕成向等之義御他領開合之上
追々取斗之義御用□

申出到处宜取計様被申達

阿なた様御領分浦々之義も□□

取斗可申所存二御座候尤 当御領

内絵図面之義も御郡御町二而

致出来候間浦方町間干潟□

之儀右奉行中申談認か、□

右改之節御町懸リ之分者役□

差出為立会候得共御郡懸リ分

数ヶ所之義□最早御迎船役

先之 致出船候二付右

奉行中江相聞 差出不申候

阿なた様浦方町数御改之義

御役方二而宣御取斗御座候様

致度御座候右 可得御意 如此

御座候已上

五月廿六日 篠原為治
戸祭嘉吉

(注 途切れ、意味不明な部分が多いが感覚的には
ご理解いただけたらと思います)

文化五辰年日記

六月分

勘定方

同十二日 天

一 今晚 御銀船出帆二付

銀 拾貳〆目

但し金貳百兩代 鴻ノ池返銀 治郎左衛門一名
二而文通但し利銀差添申候事

同五十貫目

為替引当 井筒屋□□

右船江井筒屋治郎□清兵衛乗

晩方周藏暇乞旅宿へ参ル 同

酒五升弁当其外干肴野菜類□

一 代官利左エ門方測量二付此度出来候浦手

画図差出ス 明日豫込へ持参之由 并二

表方二而は此度豫込へ参候庄屋共江

御郡方添簡参候由此方二而も同様又

願出候二付表御部方西田三右衛門申談し

阿の方文通に認かへ貰筈二 相成其段

利右衛門江申置候事

一 夜中三輪善助来ル 測量書上案文

差出ス 表方並合之事二付 存寄無之

旨申置 直二戻ス 此方羽方村庄屋

森小八郎 東白方村同久兵衛□□

一 先年御巡見之節は庄屋共□□□

憚候様二相見候得共 此度 森小□□

二而豫込へ参候□ 阿の方二而承合□□□

被申候様達置候事

同十三日 天

一 野間利左エ門方松さき川画図二付帳面

出ル 右は御領境難相判二付 村方扣

相糺見候様 先頃申達置候事 也

注

記事の中の2つの図は、村境を示すものです。
記事中の略図で、図面といえないものですが、
当時はこのように村境が決められていたこと
が分ります。



村境を示す図

村境覚

一 大見村 濱之堂南東境

一 朝津川添道切境

一 唐嶋向堤切境

一 塩木水門切境

但し

一 南は吉津村

一 西は宅間村

一 東は松崎村

右水門ノ上二而三ヶ村分

- 一の場濱之東切境
- 一 高野三玉両境也
- 一 北浦山神上峯を相へ八丁縄手
- 一 松崎江分り
- 一 水出黒石辻境也

- 一 宅間境九りの木屋居□□
- 所は新濱東角を拾□□
- 四拾□置此処小浦大□□
- 場土切古加婦置御取□□

- 一 元禄十五年午正月十六日
- 山階村庄右衛門と申者 死去
- 仕候場所者託間村塩濱新田
- 堤東角を式拾間西江より
- 北の方へ四拾間置此処二死去
- 仕居申候所二松崎分二相成
- 受取

御上様江御注進申上 其後山階
村を尋参、相渡し相済申候
其時庄屋者

- 松崎村庄屋
- 善兵衛
- 宅間村庄屋
- 藤兵衛
- 上高瀬村大庄屋
- 新□□□□

御手紙得御意候 夏□□
得共愈御堅固御勤可□□□□
奉存候、然者 当村之者汐□□
立干仕度段願書 願之通

仰付候 右立干之場所 松崎
分へも相懸り申候 依之 松崎分
懸り合之場所致借用度御座候
右為可得御意如此御座候
十月廿一日 眞部為之蒸

宇野清蔵様
追而得御意候 本書之御返事
早々御差越し可被下候

此間は預御手紙致拝見候 寒
冷相増候得共弥御堅勝二被成
御勤珍重奉存候 然者其御□
汐木二而立干仕度段□□□□
願之通 被仰付右之□□□□
場所松崎分江相懸候□□
右場所御借用被成度

聞則
御上を松崎村江其段被□□
仰付先今般之義御用意候様
相済申候 猶重々之義も
□聞次第相納申可申談候
間 左様二御心得可成候右可
得御意 如此御座候
十月廿八日 宇野清蔵
眞鍋為之蒸様

一 覚
此度下高瀬村百姓之内塩木
二お為て立干綱之義
表様江相願 願之通□□
然る処右網場所□□□□

六月

- 一 吉川又右衛門

同十六日天

- 一 又右衛門 引越の件役方へ達ス

- 一 表御郡方を 測量御役人巡行 土笏表

仕成帳差越候 早々写取候様□□□□
達ス 昨日□□ 認戻し□記ス 今朝□□□□
出来 要助を出し候二付 表方へ昨日も返事
二添 帳面戻し候 右帳 求馬殿へ
松さき画図并帳面求馬殿へ入御披見候事

同十七日天

- 一 来ル十九日 御用米貳百五拾
を積廻し 蔵奉行を

つづく

(注) これまでの分で全体の三分の一くらいであ
ろうか。まだまだ測量隊ははるか彼方である。
近づくにつれて内容が具体化する。原文書が
傷んで読めない部分がかなりあり、ひどい内
容であるが、流れは把握していただけたと思
う。
データ化に努力していただいた中村泰子さ
んに、あらためて敬意を表したい。ありがと
うございました。

伊能探訪

― 肥前・筑前の旅 ―

玉造 功

平成二十六年十一月に全国町並み保存連盟の「第三十七回全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会」にNPO法人「小野川と佐原の町並みを考える会」の一員として参加する機会が与えられました。その際、佐賀県嬉野市で伊能忠敬の案内板に、福岡県宗像市で記念碑に出会いました。

三年前の、それも伊能忠敬研究会に入会する以前の伊能探訪で恐縮なのですが、河崎倫代会員の「ちよこつと伊能探訪のすすめ」にしたがって、「ちよこつと」と投稿させていただきます。

一 佐原と佐賀県鹿島市

全国町並みゼミの開催地である佐賀県鹿島市と千葉県香取市佐原は歴史的な関係で結ばれている。それは肥前鹿島藩の初代藩主となる鍋島忠茂が徳川秀忠から現在の香取市内に五千石の領地を与えられ、忠茂を初めとする鍋島氏四代の墓所が香取市内の円通寺にあるという縁に始まった。

また、鹿島市では平成二十四年に「伊能忠敬来鹿二百年記念事業」として、小学生による伊能忠敬学習発表会や歩測体験、伊能測量隊にもてなしたであろうという「伊能御膳」の再現など様々なイベントが行われた。このようなことから、両市の交流が深まり、『友好都市協定』が結ばれている。さらに、両市ともに、歴史的に貴重な町並みが有り、国の重要伝統的建造物群保存地区（以下重伝建地区と略す）に指定されている。酒造業が盛んであるなど共通点も多い。

二 鹿島市と嬉野市の歴史的な町並み



浜中町八本木宿の酒蔵通り

重伝建地区の指定を受けた鹿島市の肥前浜宿の町並みは、有明海に注ぐ浜川の両岸に位置し、性格の異なる二つの地区から成り立っている。

浜中町八本木宿は江戸時代の宿場町から始まり、明治にかけて酒造業で発展した醸造町である。酒蔵通りを中心に酒蔵等の白壁土蔵が多く建ち並ぶ。大会の開会式は酒蔵の中で行なわれた。また、武家屋敷などもあり多彩な町並みとなっている。浜庄津町浜金屋町は、浜川の対岸の少し下流に位置している。こちらは鹿島藩の港として成立し

た在郷町であり、江戸時代から商人や船乗り、鍛冶屋や大工などが暮らしてきた茅葺町家の個性的な町並みが特色である。京都の美山や南会津の前沢などの茅葺農家の集落は見てきたが、茅葺屋根の町家が続く町並みは珍しいものである。



浜庄津町浜金屋町の茅葺きの町屋

狭い路地に茅葺町屋が密集するため、通常の放水銃では効果がないとのこと、背の高いノズルから散水するユニークな消防設備を設置している。

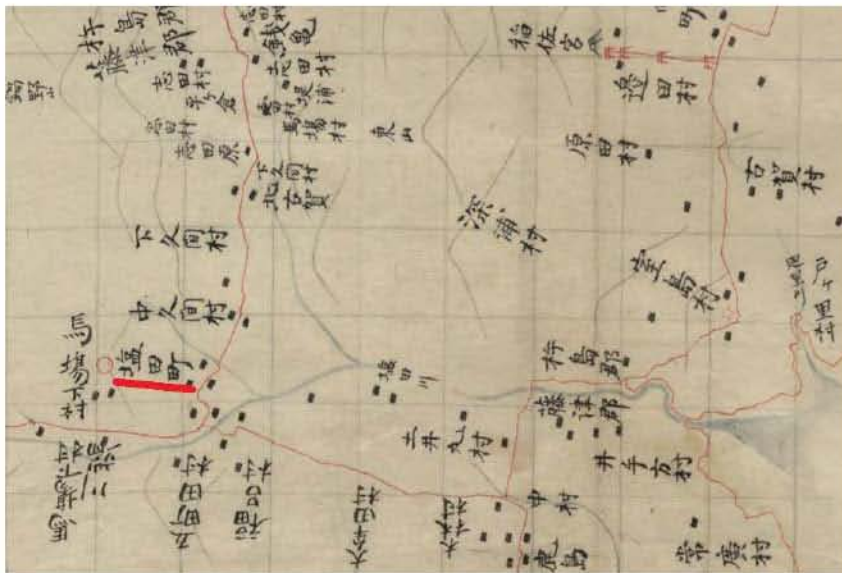
重伝建地区の歴史的な町並みは、本来であれば、建築基準法違反、消防法違反の町並みとならざるをえないため、防火対策に工夫を凝らして、法の適用除外や規制の緩和を受けている。ただ、防火対策と景観保全の両立は難しい課題である。

翌日の現地研修は嬉野市塩田津地区である。地元のボランティアガイドさんの説明では、嬉野市塩田津地区は長崎街道の陸運と塩田川の水運が交差する場所として賑わったとのこと。アメリカ大図を見ると、塩田津は内陸にあるが、有明海の干満の差を利用して、満ち潮で船が入り、引き潮で船が出ていったという。

「居蔵家（いぐらや）」という白い漆喰が美しい大型の町家が建ち並ぶ町並みがその繁栄を物語っている。ガイドさんに「伊能探訪三種の神器」である伊能大図と、『伊能忠敬測量日記』から文化十



嬉野市塩田津地区の居蔵家（いぐらや）



「大図第 201 号 肥前・大村」から塩田 アメリカ議会図書館蔵

年九月二十三日の部分をお見せした。「四時半頃に塩田町着。止宿 本陣 弥平治、脇善七、外平兵衛」

ガイドさん曰く「弥平治は古賀さんのところ、平兵衛はすぐそこ、右側の二軒目の江口さん」のことである。正面から写真を撮りに行こうとしたところで、「分科会会場へバスが出発します。時間が押しています。大至急お戻り下さい。」との無情のアナウンス。上の写真の右側二軒目の居蔵家が測量隊の分宿先とのことである。

私の参加した分科会は「志田焼の里博物館」で開催された。会場はサブタイトルの「地域遺産の活用」にふさわしい、四十名を超す参加者を収容する巨大な志田焼の窯の中である。

地元の報告によると、昭和五十九年に廃業した磁器工場をそのままの姿で保存して、市営の「志田焼の里博物館」とし、地元の自治会が振興会を結成して指定管理者となり、児童生徒の体験学習や地域の祭りの場として利用しているとのこと。

まさに、地域遺産を地域の人々が守り、地域で活用している好事例である。会場となった巨大な窯では火鉢を焼成していたという。近代化産業遺産群に指定されている。



嬉野市「志田焼の里博物館」の窯の中

三 嬉野温泉で見つけた伊能忠敬案内板



案内板 旅館大村屋(伊能忠敬本陣跡)

宿泊場所は嬉野温泉の宿が指定されていた。折角なので、佐原から同行しているボランティアガイド仲間と、嬉野温泉の公衆浴場である「シーボルトの湯」に向った。

おしゃれな洋館風の「シーボルトの湯」やレトロな嬉野橋の写真を撮っていると、塀に陶板の案内板があるのを見つけた。伊能忠敬本陣跡とあり、「伊能忠敬一行もここを本陣とした」とある。

現在の大村屋



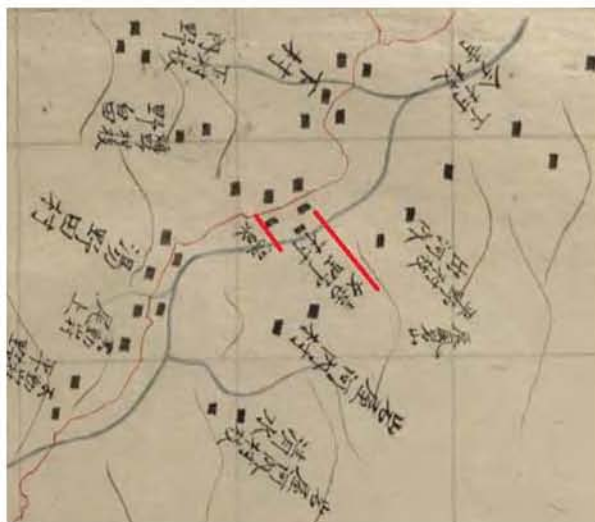
「アメリカ大図第二〇一号 肥前・大村」を見ると嬉野村のわきに「温泉」の文字が見える。ただ、測量日

宿に戻り、『伊能忠敬測量日記』のコピーから、文化十年九月二十一日の記事を探すと、
「嬉野温泉あり。止宿 本陣小筒屋毒兵衛、脇大村屋兵次郎。七ツ時頃に江戸行き書状を渡谷順四郎に渡。佐嘉侯より一同へ御贈物あり。…此夜星測。」とある。

宿の人に聞くと、大村屋さんは今でもありますよとのこと。翌朝、大村屋を訪ねてみた。そこで話を聞くと、残念なこと、大正時代の嬉野温泉の大火で古文書などの記録は焼失してしまつたとのことである。



記には「星測」とあるが、このアメリカ大図には天測個所を示す☆印が見えない。



「大図第 201 号 肥前・大村」から嬉野
アメリカ議会図書館蔵

四 平戸と的山(あづち)大島

全国町並みゼミ終了後のオプショナルツアーの現地見学では、佐原からの参加者三名は離島の重伝建地区の神浦と平戸市を巡るコースを選んだ。最初に向ったのは、玄界灘に浮かぶ的山大島の

なお、このとき嬉野から出した江戸行き書状のなかに、忠敬の弟子の尾形謙二郎、箱田良介、保木敬蔵が連名で出した書状が含まれていた。

忠敬の娘の妙薫に宛てたもので、伊能忠敬記念館の国宝書状類番号第二八〇がそれである。坂部貞兵衛の死と嫡男の伊能景敬の重病の報に、尊師が落胆しているという内容である。

重伝建地区である神浦（こうのうら）である。平戸港からフェリーで約四十分の船旅である。ここはかつて捕鯨の組織である鯨組の基地として栄えた離島の港町である。狭い道の両側には、江戸から明治時代の家が軒を並べている。

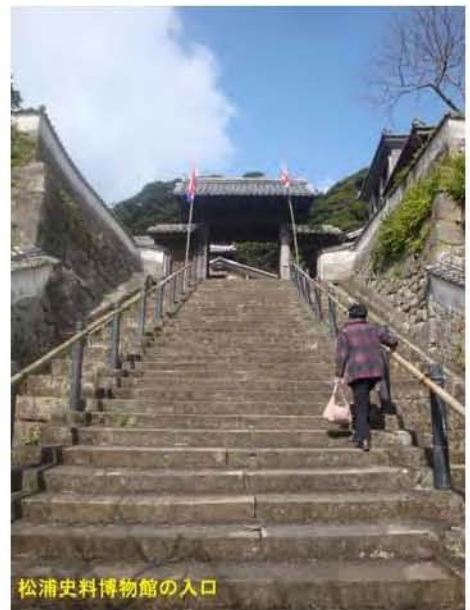


神浦の町並み

伊能忠敬は文化十年三月三日から十日まで神浦に滞在し、六日には「江戸行書状」を平戸に送った。「東河父」から「妙薫尼へ」宛てた書状が伊能忠敬記念館の国宝書状類番号第七『伊能忠敬書状』の十一頁である。その追伸に、

「三治郎、鉄之助壯健ニ成長、三治郎ハ哥カルタヲ能取候よし、行と弟子ニ可相成候。当十一月帰府候ハ、両孫共ニ対顔可致と相樂ミ候。」
対馬海峡の離島から幼い孫との対面を心待ちにしている姿がほほえましい。

的山大島から平戸市内に戻ってきたが、今回の見学コースは町並み保存が中心であるため、松浦史料博物館が入っていない。そこで、昼食の一時



松浦史料博物館の入口

間をカットして松浦史料博物館に入館し、由緒正しい伊能図を拝見することにした。「由緒正しい」というのは、この地図が伊能測量隊の作成によるものであること、平戸藩九代藩主松浦静山が地図作成を依頼した経緯について自著『甲子夜話』に、「伊能を招て接対し：領内測量の地図一本を予に贈るべしと約して、伊能も諾したり」と記録していること、忠敬の江戸日記にも松浦侯との交流が記されていること、忠敬の歿後、地図を受領した平戸藩が「御絵図副書」に経緯を詳細に記録していることによる。「御絵図副書」によると、忠敬との約束により天文方の高橋景保から入手した地図に対する経費として金六両三步と銀二匁を、高橋景保に対しては「茶宇御袴地一反」と「ていら三斤」を、地図作成にあたった下役八名に対して金五百疋などを贈っている。

念願の伊能図に直面することができた。展示してあったのは、「伊能図 平戸島図」と「伊能図 九州全図」である。丁寧な仕上げの美麗極まりないものであった。もっとも、見学が終わった後の佐

原の三名の会話は、六両余というのは安すぎないか、「ていら」とはカステラのことだろうかという話題に終始した。

会報第45号9頁の前田幸子氏の記事によると、「ていら」とは、さらした鯨肉のことである。

「伊能図 平戸島図」からの的山大島
松浦史料博物館蔵 『伊能図大全』より



「平戸島図」の全体については、会報73号の星野由尚氏の「フタバ伊能図の旅」で見ることが出来る。

五 宗像市で伊能忠敬の記念碑に遭遇

オプショナルツアーは佐世保駅で解散した。千葉県から九州に来る機会もあまりないので、レンタカーで有田の重伝建地区、伊万里、呼子、唐津の町並みをまわって、旅行の最終日に向ったのが福岡県の宗像大社の高宮祭場である。

高宮祭場は「海の子倉院・沖ノ島」とともに宗像大社で最も神聖な場所である。写真の奥の注連縄で囲まれた樹木（神籬・ひもろぎ）を神の依代として祭事が行なわれる。



宗像大社の高宮祭場

かがうことが出来る。私が訪れたときは、静寂そのものであり、時折、玄界灘からの風で、木々がそよぐ音が聞こえるだけであつた。ユネスコの世界文化遺産登録の朗報を聞きたいものである。帰りの飛行機まで若干時間があつたので、神湊に寄つてみた。宗像大社の外港で、中津宮の鎮座する大島への船がでている。港の近くまで来たところで「伊能忠敬」の文字が目に入った。慌てて車を止めて写真を撮つた。

「伊能忠敬宿泊跡」「藩米積出場所」とあり、反対側には「俳人種田山頭火句碑」の文字も見える。お店の看板には「魚屋」とあるが、見たところ旅館のようである。全く人氣が無い。帰宅してから調べてみると休業中のようなのである。

測量日記の文化九年七月二十六日を見ると、海



辺測量からわざわざ内陸の宗像大社まで測量している。そして宿泊地については、「止宿本陣 丸二屋兵右衛門、列宿 酒屋三之丞」とある。石碑の置かれている現在の「魚屋」との関係はわからないままである。地元の方の御教示を願うばかりである。

伊能忠敬像制作記

彫刻家 酒井道久



伊能洋先生から伊能忠敬像の制作者に推薦した
いと、お電話を頂いたのは二〇〇〇年十一月ごろ
だったと思います。突然の話でびっくりしまし
たが、歴史上の偉人のモニュメントなので大変光栄
なお話で、私にとっても代表作にする覚悟でお引
き受けしました。

日本人なら誰でも教わっている伊能忠敬のモニ
ュメントですから、じっくりと忠敬の人物像や業
績を勉強し、構想を練って習作で検討を重ねてか
ら本制作、そうすると制作期間は二年ぐらいかか
るかなと想定しましたが、予定を伺うと伊能測量
開始二〇〇年記念に合わせ一年にも満たない二〇
〇一年一〇月一七日に除幕式をすでに予定してい
るということで、いささか慌てました。

ここで大まかな彫刻の制作過程をお話します。

作品のイメージをデッサンなどで検討↓プロポ
ーション、動き、全体の構成を検討しながら習作
を油粘土で制作、↓本制作（木材、針金、棕櫚縄
などで心棒を作り粘土で成形）↓石膏取り↓修正
↓ブロンズ鑄造↓修正↓着色↓設置という段取り
です。石膏取り、修正、ブロンズ鑄造に最短二か
月半、逆算すると粘土原型は七月末には終えなけ
ればならないことになりました。

すぐにイメージを作るため、NHKで放映され
た井上ひさしの「四千万歩の男」のビデオ、忠敬
関連の書籍などで、生い立ち、業績などを調べま
した。モニュメントの肖像彫刻で大事なのは、そ
の人物を象徴的に表すこと、つまりポーズであつ
たり、衣装や持ち物であつたり、その人物が歴史
に名を残すことになった行動や業績を端的に表し
、なるべく一目で伊能忠敬と判るようにすること
です。顔は写真や肖像画が残っている場合は、特徴
を捉え、似ていることは言うまでもありません。
その上で、「歩く」、「測量」、「五十五歳から」、
という三つが誰にでも分かり易いキーワードと考
え、歩く姿で測量を象徴する器具を持ち、初老の姿
の立像という構想に絞られてきました。

いよいよイメージデッサンを作るにあたり、唯
一残る青木勝次郎による忠敬の肖像画（一）から、
彼の顔の際立った特徴を把握します。この肖像画
は忠敬没後の一八二二年（文政四年）ごろに描か
れたとされていますが、かなり写実性が高いと思
われます。まず目につくのは、ちよつと日本人離
れした奥行き深い立体的な骨格と大きく高い鼻
小さめで、落ち込んだ口は既にほとんどの歯を失

っていたためと思われます。少し高い頬骨も特徴
でしょう。この青木による肖像画は、以上の特徴
や棒を着けているところから、かなり晩年の忠敬
を記憶の元に描いたと思われます。



（１）伊能忠敬肖像画

以前、日本
野鳥の会の創
立者である中
西悟堂像（二）
を制作した際、
何枚かの写真
を参考にしま
したが、最晩
年の写真は、
仕事をやり遂
げた穏やかな表情の老人の姿で仕事に打ち込む熱
気や自信はあまり感じられないものでした。私が
選んだのはもう少し若い時代の鳥を肩に乗せて、
話しかけるような写真でした。忠敬像でも青木の
肖像画のよう
な最晩年の顔
や姿ではなく、
六十代前半の
精力的で自信
に溢れた姿の
方が伊能忠敬
を表すには最
適で美しいと
思い、肖像画をもとにして、一回り若い六五歳ぐ
らいの忠敬を想像しながらデッサンに取り掛かり
ました。強靱な精神力、風格をどんな表情で表現
するかがこの作品の最重要な課題になりました。
また像高は、忠敬の背丈を一六〇cm程度と想定



（２）中西悟堂像

な最晩年の顔
や姿ではなく、
六十代前半の
精力的で自信
に溢れた姿の
方が伊能忠敬
を表すには最
適で美しいと
思い、肖像画をもとにして、一回り若い六五歳ぐ
らいの忠敬を想像しながらデッサンに取り掛かり
ました。強靱な精神力、風格をどんな表情で表現
するかがこの作品の最重要な課題になりました。
また像高は、忠敬の背丈を一六〇cm程度と想定

しましたが、公共の野外に設置するモニュメントとして、ある程度の大きさが必要ということ、一・三三の約二・二mにしました。大事な歩幅は記録にある六十九cmの、一・三三の約九十二cmとしました。

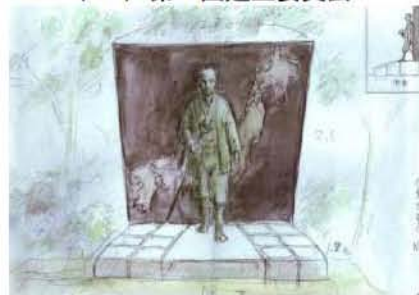
普通、彫刻は等身大に作るとかなり小さく感じられます。それは、ブロンズでも木彫でもそれ自体が生命を持たないため、人間が発する生気や色や動きなどがないからでしょう。彫刻家はそれを補うために多少大きめに作ったり、フォルムの強調や単純化によるデフォルメをします。そのような作業によって、初めて彫刻に生命感が湧いてくるのです。

また、以上の条件や大きさを考慮した上で、伊能図を背景にして地図から歩み出て来るような構想が浮かびました。背景の地図に体の一部を同化させ、今まさに歩測に向かうという構想です。台座は普通、野外に設置する場合は離れたところからも目立つように、近くで見るときは威厳を感じさせるようにかなり高くすることが多いようです。しかし、伊能像の設置予定の場所は周囲もビルに囲まれた神社の境内で、遠くから見ることがはないと思われまふ。力強く歩く姿がよく見えるように、さらに伊能忠敬に親しみをもってもらうために高い台座ではなく、地上とほとんど同じ高さにすることにしました。イメージ図で示したように参道を模した御影石の上に直接足が乗るようにしました。

二〇〇一年一月六日、伊能洋先生と設置予定地の富岡八幡宮内で最適な場所を選挙。一月十二日、第一回伊能忠敬建立委員会開催（3）三月十五日、第一回伊能忠敬銅像建立実行委員会・同幹事



（3）第1回建立委員会



（4）イメージ図

顔のデッサン。
二〇〇一年三月三十一日、伊能洋先生、陽子夫人と1日がかりで伊能忠敬九十九里の忠敬像（天を指さし、星の角度を測る姿）を見学。その後、佐原で諏訪公園の忠敬像（右手に筆、左手には帳面を持ち測量を記録する姿、忠敬の旧宅を見学。記念館で測量器具を見学、彎筆羅鍼（ワンカラシン）の長さなど計測。肖像彫刻として有名な上野の西郷さんも参考にモニュメントとしての大きさ、高さ、衣装の表現などを研究し、四月十二日から二〇日まで、忠敬の顔と歩測する姿をデッサン。

二十一日より五分の一の大きさ（像高約四十四cm）の習作の制作開始。

会合同会議開催イメージ図二点を委員会に提出。背面の地図を彫り込んだ石にかかとの一部と羽織が後ろになびいた部分をめり込んだようにして地図と一体化し、地図から飛び出してくるような構想を説明しました。

デッサン開始。

まず、教科書に掲載される忠敬の肖像画を参考に



（5）伊能新氏、伊能陽子夫人と



（6）神保家6代目、7代



（7）松竹衣装部

四月二十四日設置場所の周囲の設計を造園デザイナーの桜庭隆史氏と検討。その後、伊能洋先生の紹介により松竹衣装部で伊能忠敬の衣装をスタッフ纏ってもらい、歩くポーズを撮影（7）、服装の皺などをデッサンする。



(9) 心棒作り

二十三日、日程確認、銅像取り付け法、同時に設置する測量の国家基準点(二等三角点) (17)

(9) 三十一日、粘土一トンを用意。
六月一日、本制作開始。重さを考慮し、胴体など太い部分は木材でおおよそ作り軽量化を図る。



(11) 粘土原型



(13) ブロンズ鑄造

五月六日、習作完成(8)
十日、石膏屋と鋳物屋と日程検討。
二十三日、富岡八幡に於ける伊能忠敬研究会で習作を提示。



(8) 習作



(10) 背景の黒御

のデザイン、周囲の植栽など検討。伊能像の背景の黒御影石を選定し、伊能小図を拡大コピーした図面を準備し、石材屋に発注。(10)
七月二十四日 伊能洋先生の紹介により江戸東京博物館の竹内館長、小澤教授に忠敬像の衣服や八月十日、伊能洋氏、渡辺一郎氏に完成間近の粘土原型を披露。(11)(12)
歩き方などの時代考証をしていただく。
十二日、伊能像原型完成、石膏取り。

二十三日、石膏原型の修正開始。
九月四日、伊能忠敬像起工式。
五日、基礎工事開始。石膏原型を池田美術鑄造でブロンズ鑄造開始。(13)



(12) 完成間近の原型と伊能、渡辺氏



(14) 設置

十六日、銅像設置。(14)
十七日、報道関係にお披露目。
二十日、除幕。(中川会長ら関係者及び忠敬に扮した俳優加藤剛、賀来千賀子さんら)

十月五日、ブロンズ仕上がり確認。
十二日、ブロンズ着色。



(13) ブロンズ casting



(16) 伊能記念館の習作



(15) 除幕式



富岡八幡宮の伊能忠敬像

先生、陽子夫人、また、発起人で計画段階からすべてを滞りなく進め、私が制作に集中出来る環境を整えていただいた渡辺一郎氏、最適な場所を提供していただいた富岡八幡宮、浄財を頂いた大勢の皆様他、すべての関係者の方々に深く感謝いたします。



(17) 三等三角点

本制作に関しては、数多くの資料を提供して頂いた上に、伊能関係の神保家をはじめ、伊能記念館ゆかりの地に同行して頂き、彫刻の段階までアドバイスを頂いた監修者の伊能洋

十一月、習作のブロンズ像を伊能忠敬記念館に寄贈。(16)

忠敬、江戸の仮住い

柏木隆雄

浅草の吾妻橋からお台場まで、船で行く東京観光は風情があつて面白い。隅田川に架る橋を下から眺めて深川辺りにさしかかると、清洲橋や永代橋の美しい姿が見えてくる。船が永代橋を通過するとき、私は「四千万歩の男」のあの場面を想像してしまう。尾籠な話であるが、忠敬が大の糞を踏んで、雪駄の白足袋についた汚物を懷紙で拭つて、隅田川に捨てるくんだり。忠敬が永代橋を渡るとき、井上ひさしの記述では、通行料を払えとしつこく迫るやぐさ風の橋番と、それをやんわりとりなす内妻のお栄を登場させている。

お栄は橋番の男に「この男は絵図をつくるのが仕事、深川黒江町の幸七店から浅草の司天台までの距離を測っている」と説明。「絵図ならいくらでもそこいらで売っている」とまた橋番にからまれると、「もつと方角も距離もくわしく正しい絵図が要るの。それで深川黒江町幸七店から司天台まで、直線距離を測っている」お栄はつけ加えてこう答える。井上ひさしは、この二人の短いやりとりの中で、忠敬住いを「黒江町幸七店」と重複と思われる記述を行っている。

私が初めて「四千万歩の男」を読んだとき、あまりの長編なので、このあたりの記述はとばし読みしたのか、憶えていなかった。その後伊能三郎右衛門家と柏木家が縁戚という家系のつながりもあつて、忠敬研究会に入会し、いろいろ調べてみると、井上ひさしが文中でお栄に二度も言わせた「幸七店」は、先祖の柏木幸七の江戸深川店であ

ることを知った。

以前、市川市で井上ひさし展が催され、当誌の歴代編集長の福田弘行氏と前田幸子氏に同行し見に行った。「四千万歩の男」のコーナーに山と積まれた伊能忠敬関係図書と資料に驚いた。一つの作品を仕上げるプロ作家の執念を感じとった。

忠敬が隠居し佐原から江戸に出て深川黒江町に住いを持った、と一般にはそう書かれているが、実際は、深川黒江町の柏木幸七の店に仮寓したのである。ただこれも仮住いとは言えないほど長く続いた。寛政七年五月の出府時から、文化十一年の六月まで。地図御用所として手狭になり、八丁堀亀島町の桑原隆朝の屋敷の一部を借受け移住したのである。

忠敬日記に見る幸七店との関係

寛政十二年四月、忠敬に測量許可が下される直前に忠敬は幕府への測量請願、交渉時の頻繁なやりとりを日記「蝦夷干役志」に書き残している。

閏四月十三日

〈松平信濃守屋敷への呼び出し状〉

尚々麻上下御用意に而、御出被成候方可、然哉に奉存候。

靈巖島御会所より

柄原屋角兵衛

田中屋 伊助

黒江町家主幸七店

伊能勘解由様

井上ひさしは、忠敬日記の中のこの記述を見逃さなかった。

「四千万歩の男」(講談社文庫本)

(51ページ)“忠敬に住いを貸している家主の幸七老人・・・去年の三月から忠敬は借家の屋根の上に二間四方の物干台・・・”

井上ひさしは念を押すようにこう書いている。

大谷亮吉編著「伊能忠敬」では

岩波書店の初版本「伊能忠敬」(48ページ)“実測の必要なるを了知せり。偶忠敬の居所、深川黒江町と浅草歴局との偉度を異にすること、一分半・・・”

(同53ページ)“露木元右衛門なるもの、忠敬の僑居に臨みてこの月、十六日、出雲守より忠敬をして・・・”

(同59ページ)“全国測量の端緒たるべき第一步を深川黒江町なる僑居より踏み出せり。”

(同60ページ)“忠敬はその僑居を発してより途を奥州街道に取り間断なく歩数を以って行路の距離を定め・・・”

以上、抜き書したが、「寓居」「僑居」とも言葉の意味は「仮住い」である。(広辞苑)

柏木幸七とは

柏木幸七は、忠敬の佐原時代の商家の番頭で、関場幸七、真木場幸七とも呼ばれていた。幸七は元々は伊能三郎右衛門家の出、忠敬より三代前の昌雄の三男で分家して柏木氏を名乗った。忠敬より年長で、江戸表に店を持ち、米、油、薪炭など手広く商いをしていた。忠敬の先妻、達が亡くなった後、娘の妙諦(本名はいまだに不明)が忠敬の身の廻りの世話をし、二男一女を生んだ。次男の秀蔵の母親である。幸七は、忠敬の蝦夷地測量の長旅の門出を千住で、倅の時右衛門と共に見送

った。

忠敬が測量の助手として連れていった次男の秀蔵は幸七の孫、その旅立ちも心配であったのだらう。幸七は、見送りの日から三年後、江戸で亡くなった。

(かしわぎたかお、柏木幸七の子孫)

〈付記〉

深川黒江町

永代橋近く、隅田川から割り込んだ仙台堀の支流に面し、松平加賀守、伊達遠江守の屋敷に隣接している。永代寺、富岡八幡宮の広大な緑の領域は至近。川筋を利用した船積問屋、米穀商、油商、材木商などの問屋が多く所在する。

本誌78号で、玉造功氏が考証論述されていた佐原屋庄兵衛。箱崎町から深川黒江町まで川筋の利便で、柏木幸七の店とも商売上の交際があり、佐原からの米、油、酒、薪などの物資の荷送を請負っていた。

〈掲載写真〉

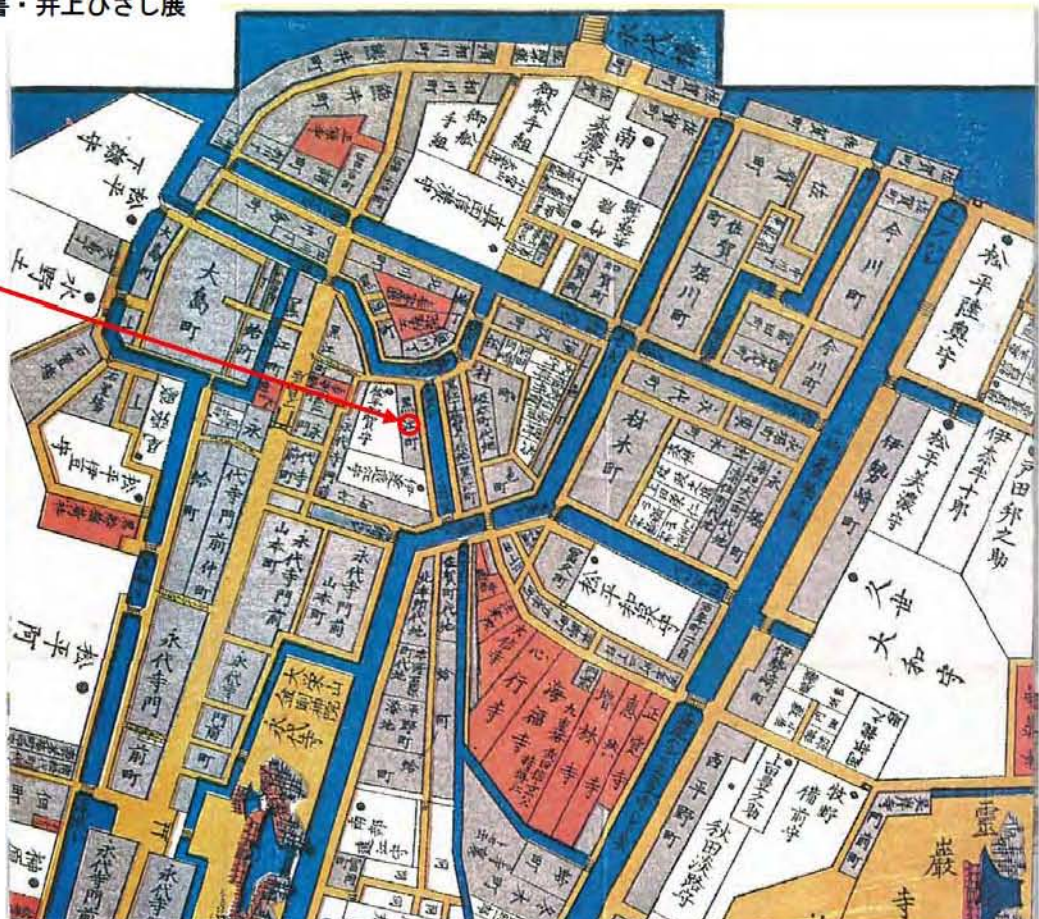
忠敬関係図書
江戸深川絵図



忠敬関係図書・井上ひさし展

江戸切絵図

資料の切絵図は、嘉永五年刊行の金鱗堂尾張屋版の深川絵図である。金鱗堂版の特色は色摺りが華やかで、神社仏閣は赤、橋と道路は黄、町屋は灰色、海川池は青、森や馬場は緑と色分けし、見易く工夫されている。



江戸深川絵図 嘉永5年金鱗堂版

伊能忠敬旧宅

「訂正とお詫び」

前八十一号での拙稿の中、「忠敬が模写した世界図」は伊能淳氏が所蔵するもので、「伊能家から忠敬記念館に寄贈」は誤りでした。訂正し、伊能淳氏に深くお詫びを申し上げます。

柏木隆雄

忠敬資料の絵図

「金澤八景之図」を読み解く

神奈川県藤沢市 文 大沼 晃
写真・構成 狼 芳明

平成二十八年十一月二十二日、本研究会会員の柏木隆雄氏に誘われて千葉県佐倉城址公園内にある国立歴史民俗博物館へ出向き、柏木家寄託資料を閲覧した。以前、数ある資料の中に「金澤八景之図」（以下絵図）があることを柏木氏から伺っていたので、どの様な絵図なのか神奈川県人として興味関心があり、予てより閲覧の希望をお願いしていた。

【閲覧時の様子に関しては、会報第八十一号に掲載されている山本氏投稿の「忠敬仲間集う」をご覧ください。】

【柏木家寄託資料に関しては、会報第五十五号および五十六号に掲載されている柏木氏投稿の「柏木家の残された忠敬資料」をご覧ください。】

絵図（図1参照）は、全体に色焼けし大きなシミが付着しており、さらに欠損もあるため資料としての価値が残念ながら低く、また、どうも江戸名所図絵のように市中に広く出回っていたものではないような気がした。そのようなことで、探求心が薄れしばらく放置のままであったが、平成二十九年三月五日付け産経新聞神奈川版の「かながわ美の手帳」を読んでいたところ、神奈川県立金

沢文庫で開催中の特別展「愛された金沢八景」の紹介記事の中に、昔お世話になったことのある同

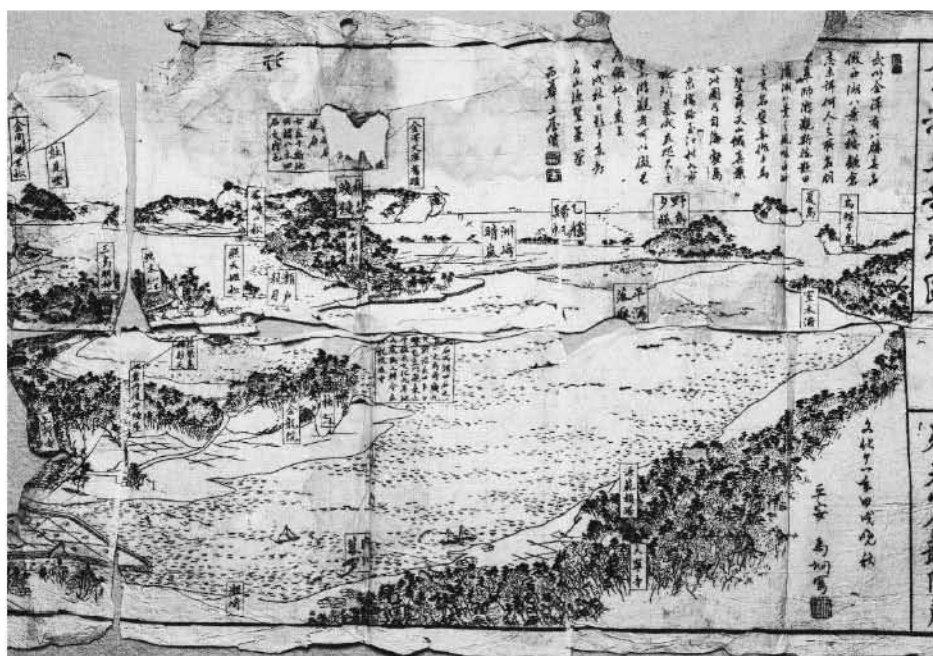


図1 出典 柏木家寄託資料 国立歴史民俗博物館蔵

文庫専門学芸員山地純氏のお名前を発見。どの様な由来の絵図なのか知りたいのは是非ともお力を頂きたいと、お願いをしたところ快くお受けいただき絵図の写真を送付したところ、折り返し山地氏から「丁寧な次のような解説付きのお手紙と

資料（図2参照）を頂戴した。

「略—伊能忠敬研究の中で、金沢八景図があるということでお写真をお送りいただきました。とても有名な図で、以前金沢文庫で開催した特別展「金沢八景歴史・景観・美術」の説明文の写し（筆者注：図録のコピー）をお送りいたします。」

この図の発行は文化十一年（一八一四）ということ、入手はその後ということになります。発行元の金龍院は現存する臨済宗建長寺派の禅宗寺院で、金沢八景図を発行した二ヶ所のうちの一つです。

金沢八景が有名になったのは、能見堂というところが明の禅僧、東皐心越（心越禅師）の詠った漢詩を刷物にして広め、「金沢八景」の八カ所がほぼ固まりました。それまでは瀟湘八景になぞらえて、色々な人が勝手に決めていたのが、心越禅師の漢詩で「能見堂八景」として決まり、それが「金沢八景」の決定版となっていました。

その後、平潟湾に突き出た岬の麓にあった昇天山金龍院が岬上に九覧亭という物見台をつくり、自ら今回のような八景図を刊行し、後に下絵を送って歌川広重に描いて貰った金沢八景図「武陽金沢八景略図」が人気となり、広重自身も八枚組の金沢八景図を描いて大人気となりました。金龍院は広重に「金沢八勝図」という小判八枚一組の浮世絵も依頼してお土産品にしました。

さてお尋ねの図は、金龍院としては最初に外部の方に依頼して描いて貰った金沢八景図です。図

中に「平安」という言葉があり、江戸ではなく、もしかしたら京都の絵師「馬こう（土十同）」に依頼した可能性があります。賛文中には馬こうが昇天山に昇って真景を描いたとあるので、京の絵師かどうかははっきりとしません。ただ、実際の姿にかなり近い可能性はあります。図の真ん中で海に突き出ている処が、昇天山金龍院九覽亭です。

—略—

このように絵図の由来や発行の時期は文化十一年甲戌晩秋であることが分かったので、多少私見を交えながら読み解いてみましょう。

(一) 絵図を初めて歴博で見たとき、伊能測量隊は第二次測量（享和元年「一八〇一」）に際し、事前準備のために絵図を入手し活用したのではないかと推測したが、大きな誤りで実際は十年後に作成されたものであった。

(二) 伊能測量隊は四月二日江戸を立ち、川崎→神奈川→保土ヶ谷→横浜を経て九日十日にかけて金沢八景一体を測量し三浦に向かった。能見堂まで足を延ばし所々測量したが、金龍院には立ち寄った形跡がない。当時は、まだ有名になっていなかったかも知れない。

【このあたりの足跡に関しては、会報五十八号に測量日記を基に筆者が投稿した「伊能忠敬と金沢八景」をご覧ください。】

(三) 文化十一年の忠敬の動きを伊能測量関係年譜で調べると、第八次測量から五月下旬江戸に戻りひと休みしたのち、深川黒江町から居宅を八丁堀亀島町の桑原隆朝宅跡へ移し地図御用所を設け

たことがわかった。
多分、公私にわたり身辺多忙であつたので、絵図の入手のためにわざわざ金龍院まで出かけたとは考えにくい。

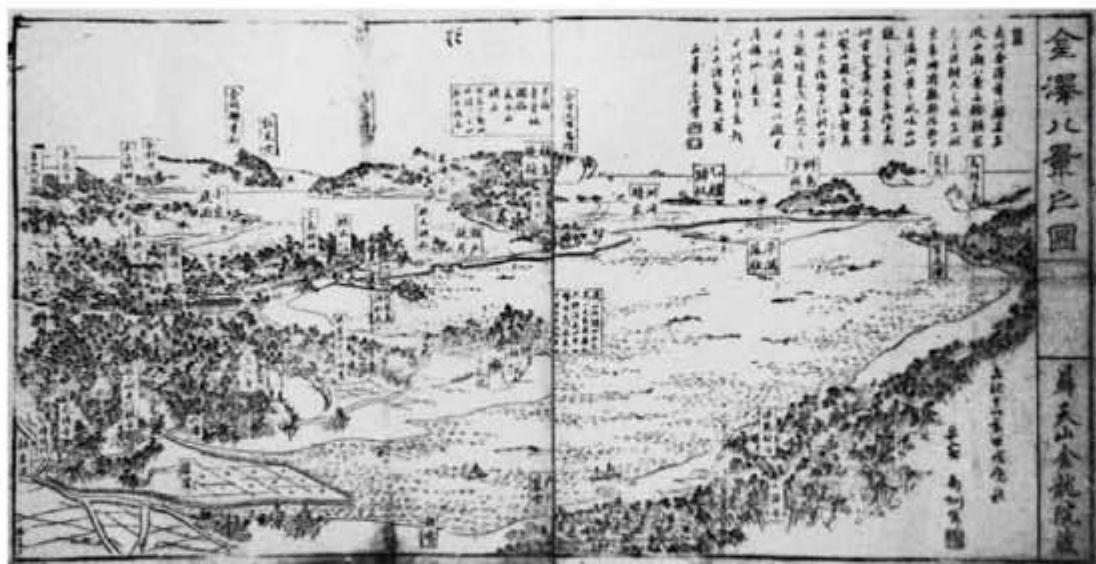


図2 出典 金沢文庫特別展「金沢八景歴史・景観・美術」図録より

(四) 図1と図2の墨の濃淡を比較すると図1の方が濃く文字や線も鮮明である。ということは初刷りに近い絵図を忠敬は誰かから手に入れ愛蔵し十二年前の第二次測量当時を思い出しながら、時々愛でたのではないだろうか。

筆者の拙い知識ではあるが、浮世絵や刷物の版木は材質の点で精々三百枚前後が限度であり、それ以上になると版木が摩耗し、文字や線が擦れてしまう宿命がある。因みに図2は、人気があるので金龍院が後々刷り増した可能性が高い。また、版元（出版元）が金龍院であると知り驚いた次第である。江戸時代、浮世絵は最先端の情報媒体で、よく版元は商家と組み、さりげなく浮世絵の中に店名の入った看板や店先を描いたものを出版した。現在でいう広告媒体の走りである。勿論、商家は見返りに何がしかの多大な対価を版元に払ったようだ。金龍院のものも刷物だが同様のことが言えるだろう。

金龍院の住職はその面で情報通であり、先見の明がある御仁のようなので、この世に生存していたならば費用対効果のバランスはどうであったのかなど、無理であることは承知の上で一度聞いてみたいと思った。

そこで四月六日、山地氏へ諸々のお礼や新たな資料収集を兼ねながら同氏による特別展の展示解説を聞きに狼会員と共に金沢文庫へ出かけ、帰路、稱名寺の門前町を散策しながら金沢文庫駅経由で金龍院まで足を進めた。お寺の周辺はすっかり住宅に囲まれており、往時の面影を忍ぶことはできなかったが、九覽亭という物見台があった岬を見上げることはできた。修行中の若いお坊さんから当時の絵図に関する言い伝えは残っていないが、版



図3 金龍禅院（狼芳明撮影）

木が現存すると我々の質問に対して答えてくれた。

（五）絵図と現代図（図4…県立金沢文庫作成の金沢歴史地図）を比較しながら鑑賞すると瀬ヶ崎あたりの上空から俯瞰した風景であることがわかる。（図4の○印のあたり）

山地氏曰く「当然、土産や宣伝用の絵図ですから狭い画面内に目に見えるものと見えないものをギョギョッと詰め込んで描いています。それがこうした絵図というもののなのです。よく見せるため

に画面の構成を変えることがあります」と解説をいただきました。

また、絵師は絵図の中央に金龍院を置き、その上部に稱名寺を配置し瀬ヶ崎から一線上に描いていることから、なかなかの技量の持ち主ではないかと推量した。

伊能測量隊も絵図に描かれたような光景の中を三崎方面に向かったのではないだろうか。最後に、神奈川県立金沢文庫専門学芸員山地純氏のご協力に対して厚く御礼申し上げます。



図4 金沢歴史地図 神奈川県立金沢文庫作成

忠敬に着せたといわれるドテラ

戸村 茂昭

はじめに

「私は陸前高田の検断だった家の分家の子孫です。本家の祖先の忠兵衛は代官からの命令で伊能忠敬測量隊を案内した、と祖先から言い伝えられてきました。その本家の子孫は先の大津波で家もろとも流されてしまいました。また、忠敬が宿泊した小友・衣地の肝入だった家には**忠敬が身に着けたドテラ**が奇跡的に今でも残っています」。

このような情報が伊能忠敬没後二〇〇年記念に向けて『伊能測量を支えた人々の子孫を探している』との報道発表を伊能忠敬研究会が行った直後に連絡担当である筆者の携帯電話に寄せられた。本稿はこの情報にまつって顕在化した奇跡的な内容をまとめたものである。

一、既存の出版物における「忠兵衛」の記述

伊能測量を解説した著書に「伊能測量隊まかり通る（渡辺一郎著 NTT出版 一九九七）」がある。第二次測量において江戸から房総・常陸・磐城・宮城・三陸にかけての沿海から三厩まで測量が日数にして百三十三日。それを記録した測量日記（原文）は二十二頁に及んでいるが、その著書の記述内容は海中引き縄測量をしたことと吹雪に難渋したこと、及び南部領の場合は「仙台領の付添い・忠兵衛の交渉がなければ、南部領では宿泊もおぼつかないところであった」とのエピソードだけである。渡辺一郎氏がしばしば力説するところの忠敬が伊能測量の方法に自信を持ったという

銚子・犬若において富士山の方位を測量したことさえ書かれていない。このわずかなエピソードに奇跡的に登場する忠兵衛こそ、冒頭の忠兵衛その人だったのである。

九月二十四日 前夜より風雨、今四ツ頃に至止む。逗留。午後より晴る。夜測量。
気仙郡大肝入より高田村検断忠兵衛、浜々付添案内。此所に至り南部領大槌町役人と対談し、是迄仙台領の止宿、首尾令。村々浜々役人案内、大肝入よりその支配の手配り、肝入検断付添の儀、領主より村触、並に難所道繕等迄委細に通達す。然る所南部領には、公儀触は勿論、領主より此度の御用触意之由に付、急に大槌支配の南部役人へ申達し候よし。それより海辺村々掛役人へ大槌町支配より申令。その支配の同村役人を別に一兩人宛付添、止宿人足の儀執計ける。**仙台領案内忠兵衛、並に唐丹浜の役人よりかけ令なくば、南部領にて止宿等の差支は意覚来候。**

図1. 陸前高田 検断 忠兵衛に関する測量日記

二、忠敬が身につけたドテラ

陸前高田は東日本大震災からの復興を象徴するモニュメントとして有名な**奇跡の一本松**があるところである。図2はその陸前高田近辺の伊能図である。



図2 伊能図#47 陸前高田近辺（伊能図大全より）

伊能測量隊は享和元（一八〇一）年九月十八日曇天の朝六ツ後に大浜村を出立し本吉郡から気仙郡にかけての海岸を船で縄を引く測量を行いながら高田村に至り、そこからは陸の海辺を濱田村・勝木田村・小友村まで測って仮肝入りと兵衛方（場所所は衣地）に宿泊した。その**家屋敷は良く、与兵衛は貞実者**であったと測量日記に記録される。翌九月十九日は二手に分かれ、本隊は半島を、平山郡蔵の支隊は内陸を測って未崎村門ノ浜の肝入り治五兵衛宅に宿泊した。

陸前高田の検断だった忠兵衛家の分家の方のお

話では、小友村仮肝入り与兵衛の子孫宅には**忠敬に提供し忠敬が身に着けたドテラ**（地元では「夜着」と呼ぶそうである）が二百年以上も経過しているのに大切に保存されて残っているという信じられないような話であった。

念のため電話番号を伺って件の子孫宅に電話でお尋ねしたところその通りという信じられないような話であった。

実地に確かめると共に写真を撮らせていただくと思いたち、千葉県山武市の自宅から家内と二人で家用車の運転を交代しながら第二次伊能測量のルートに沿った常磐自動車道を北上した。

途中、福島第一原子力発電所近くの浪江・南相馬辺りは放射能にビクビクしながら進み、仙台からは内陸の一般道路を走り、合計五五〇キロメートルほど進んでようやく陸前高田に近づいた。

直近の山間から市街地の入口にさしかかったところ、目の前の道路標識には「ここから津波浸水区域」と生々しい津波の痕跡を意味する文字が書かれていた（図3）。

更に進むとそこは全面的に更地となっており工事用重機とダンプだけが忙しく動いていた（図4）。そして、復興のモニュメントである奇跡の一本松は復興工事による嵩上げの中にこじんまりと直立しておりモニュメントとしての風格を感じることができなかった（図5）。

市街地を過ぎて内陸の小友・衣地地区に着き、目指すお宅をナビで確かめると小高い森の中なので視界に入らず、屋敷に入るルートも定かでない（図6）。



図 4. 市街地



図 3. 市街地入口

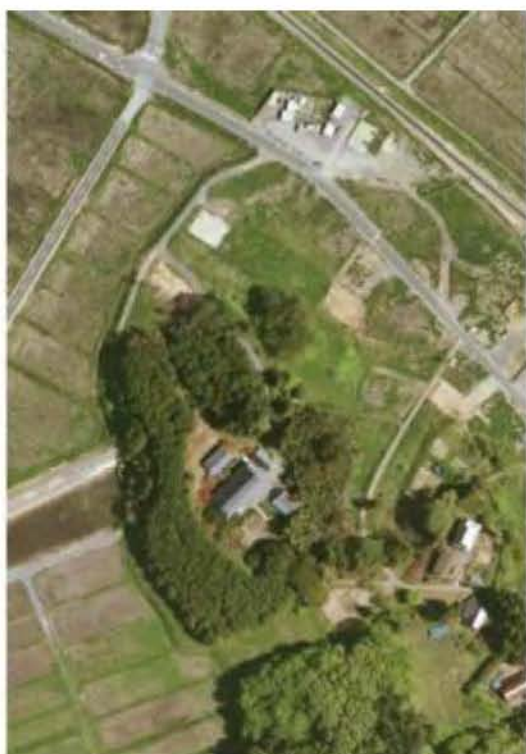


図 6. 目指す与兵衛屋敷



図 5. 奇跡の一本松

どうにか入口らしい砂利道を進んでお屋敷に入る事が出来たが、その道は結果として裏道であった。測量日記の記録「**家屋敷は良く**」のとおり立派なお屋敷で間口十四間もあった。



図7. 与兵衛家の母屋

ご主人（婦人）のお迎えを受けて家の中に入り件の夜着（ドテラ）を見せていただいた。一見しただけでその見事さに驚いた（図8・図9）。背中に鳳凰が染められ、裾にも桐の葉と花が染め抜かれていた。勿論、ほころびてもおらず直ぐにでも使えそうである。このような格調高い夜着の提供を含めた印象であろうか、測量日記で忠敬は「**与兵衛は貞実者**」という表現を使っている。



図8. 伊能忠敬がみに付けたドテラ



図9. 伊能忠敬が身に付けたドテラ（拡大）

このドテラについては、平成十三年に陸前高田市立図書館が開催した「伊能忠敬展」において展

示されたとの事で、当時の新聞記事も見せていただいた（図10）。



図10. 伊能忠敬展を報じる新聞記事

この新聞記事によれば、この展示会のきっかけも冒頭に述べた陸前高田の検断で津波の被害にあった**忠兵衛**の子孫の方であったとのことである。さらに記事には忠敬来訪時の地元の歓迎の様子の言い伝えが次のように紹介されていた。「黄川田さん宅のある地名は小友村**衣地**、そして屋号も**衣地**。これは伊能忠敬が宿泊の際、黄川田家や周辺住民が鳳凰の絵を染め抜いた**衣地のドテラ（夜着）**を使用し「踊り持ち」までして忠敬一行を丁重にもてなしたことに由来しているとのこと。測量日記に「家もよし、貞実者」とあるのは、そのもてなしに忠敬が感動したからであろう」と。

（了）

忠敬次女『篠女』の嫁ぎ先

戸村 茂昭

はじめに

忠敬に関する年譜によれば、次女篠女(以下、シノと表記する)は明和六年(西暦一七六九年)に生れ、下総国匝瑳郡大田村の通称佐兵衛家当主の加瀬修助稠卿に嫁したが子がなく、実家の佐原に帰って天明八年(西暦一七八八年)十一月九日に没した、とされている。計算すれば未だ十九歳、現代で言えば未だ初々しい娘盛りである。

筆者も、まだ初々しかったに違いない人妻シノの面影は如何ばかりか?とスマートフォンアプリ「伊能でGO」のフィールドテストのテスト・ポイントとして選んだのである。

一. 伊能でGOを同行二人の巡礼の杖として

「伊能でGO」のアプリをインストールしたスマートフォンでその「伊能でGO」のアプリを起動した瞬間、同行してくれるために画面に現れたのは、まさしくちゅうけい SNS であったのが嬉しかった(図1)。



図1. 「伊能でGo」
起動直後の画面

続いて自動的に遷移してあらわれたのは、現在位置から半径五十キロメートル圏内に設定された伊能測量隊の宿泊先が、オレンジ色の円でグーグルマップ上にポイントされており、目指すシノの嫁ぎ先・下総国匝瑳郡大田村(現千葉県旭市)の加瀬佐兵衛家と思しきポイントが「スタンプを押しにお出でお出で」と誘ってくれている(図2)。



図2. 「伊能でGo」
のスタンプ画面

早速、マイカーのエンジンをスタートさせ二十五キロメートルほど先のポイントに向かってアクセルを踏み込む。三十分ほどして目指すポイント地点に着いたが、そこは一見して大田村の名門加瀬家の屋敷跡らしい雰囲気ではなかった。おかしいぞ!。よし、調べ直してみよう、と思いたったのがキッカケである。

二. 伊能忠敬研究等での過去の調査結果

まずは手がかりを得ようと、「伊能忠敬研究」をしらべてみると、

「忠敬が泊まったこの加瀬家の場所は確定されていない」(会報第2号 伊能忠敬の房総沿岸測量 渡辺孝雄著)

「加瀬佐兵衛家の屋敷跡、墓地、菩提寺などを訪問した」(会報第31号 あたらしいことを知る

喜び 佐久間達夫著)
とあった。ところが具体的な場所は書いてない。一方、『偉人伊能忠敬翁とその子孫』(平柳翠著)には「国連大使の加瀬俊一君の総本家」とも書いてあった。

結局「伊能でGO」もポイントを決め兼ねて適当な場所を仮に設定したのだな。それにしてもこのような雰囲気のある場所では困るなと「伊能でGO」開発グループの一員でもある筆者にとつては看過できないこととなったのである。

どうしたものかなとパソコンの画面を右顧左眄している内に、「未だ誰もチャレンジしていないから可能性のあるのは、国連大使の加瀬俊一さんを調べる」と思い立った。そこで、「加瀬俊一 伊能忠敬」と検索したところ次のような記事が表示された。

「加瀬英明氏は、元日本興業銀行総裁小野英二郎の孫、外交官加瀬俊一の息子、オノ・ヨーコの従兄妹という由緒ある血筋の当主です。初代ブリタニカ百科事典 編集長でもあり、80冊を超える教科書や書籍を出版されています。」とのことであつた。

三. 加瀬英明氏からの情報

早速、メールでポイントメントをとつてみる。驚いたことに二分後には秘書の方から返信があつた。

「加瀬からでございますが、よろしければ一度、幣事務所にお越し頂きますして、お話を伺いたいと申しております。つきましては、お空きの日程をご連絡下さい」とのことである。



図3. 広報あさひの記事

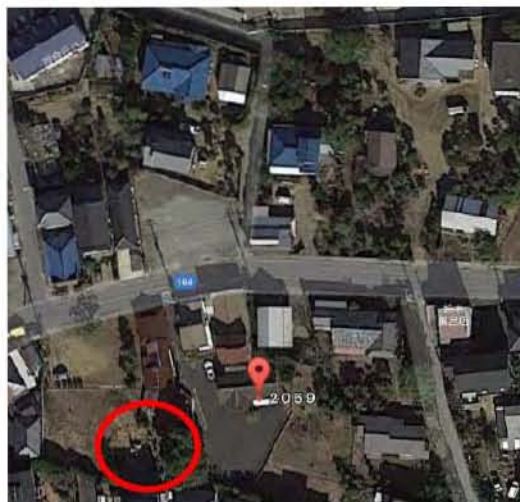


図4. 目指す地点（旭市宿天神青年館）がGoogleMapでヒット

○：墓地らしき場所



翌日、午後四時、麴町の事務所をお尋ねしたところ、ネット上の写真では怖そうであったのだが実物は昭和十一年生まれとは思えないほど若々しくも穏やかな風貌の老紳士が笑顔で迎えてくれた。そして冒頭にプリントを一枚渡された。それは「広報あさひ（H17.4.17）」の記事で題名が「旭ゆかりの人物 衆議院議員として活躍した 加瀬禧逸」というものである（図3）。

早速、その記事を黙読したところ、「加瀬禧逸さんは旭町二に生まれ・・・墓碑は宿天神区青年館隣の加瀬家墓地にある」という具体的な情報があった。面会の終了後、寄り道せず自宅に直行。早速パソコンを立ち上げてグーグルマップで検索したところ、見事に宿天神区青年館がヒットしたのである（図4）。

四. 現場にて

翌朝になって早々にナビにくだんの場所をセットして出発。三十分程して現地に着いたところ数多くの墓石には「加瀬家の墓」と刻印されている。勿論、大きな禧逸さんの墓碑もあった（図5）。



図5. 禧逸さんの墓碑

そこで、佐久間達夫さんが会報第31号に掲載したシノさんの供養墓の写真を頼りとして一つ一つ確かめ始めた。墓石は五十個以上もあってなかなか見つからなかったが、筆者の思いが通じたのであろう、三十個目ぐらいのところようやく「霜空妙融合信女墓」とはつきりと刻印されたシノさんの供養墓（図6）が見つかった。シノさんの墓石に限らずどの墓石にも何らかの花や葉は供えられ、シノさんの墓石にはハランの葉が供えられていた。

そして航空写真に切り替えて見たところ、隣に墓石らしきものが見える。



図6. シノさんの墓石

このことはすなわち、墓守が健在だという証でもある。お隣のお家を訪問し墓守の方をご存知ですか？この空き地の地権者はどなたでしょうか？加瀬俊一さんのお家はありますか？とお尋ねしたところ、

「墓守はイリのサヘイさんちの大奥さん。ほら、あそここの青い屋根の家の隣のかたですよ。俊一さんのお家は正院さんといって公民館の隣。イリのサヘイさんちの前」とのこと。

加瀬家の子孫は健在だった。お礼を申し上げてから、墓守をしてもらえるというイリのサヘイさんを訪問したところ品の良いお年寄りの即ち大奥さまが挨拶に現れたのである。

お話したところ、『古文書は大原幽学記念館に全て預けてあるが、伊能忠敬関係のものは記憶がない。但し、忠敬さんが測量の途中に来て一晩泊まっていたとは聞かされています』とのことであった。(了)



図8. 正院さんち（加瀬俊一生家）



図7. イリのサヘイさんち（加瀬家総本家）

伊能忠敬の歩いた福島

勢至堂の板橋峠を越えて会津領に

松宮 輝明

忠敬たちは享和2年6月23日（1802年7月22日）上小屋村の本陣内山茂市宅を出発し、牧野内村（天栄村牧野内）で昼食し、六ツ（午後2時）頃、長沼村（須賀川市長沼地区）に着き本陣矢部唯左衛門宅を止宿とした。長沼村金町には松平播磨守の陣屋があり測量隊を迎えた。（現在、本陣跡には須賀川信用金庫が建っている）。この夜は晴天で夕食後、天体観測をした。24日、朝3時に起き測量機器を馬に乗せ出発の準備をした。六つ（午前4時半）唯左衛門宅を出立し下江花村、上江花村を経て2里2丁（約8.2km）先の勢至堂宿に至り昼食を取った。勢至堂村の本陣柏木隼人宅は改築中の為旅籠で接待を受けた。伊能日記に「ここは会津領界で安積郡なり・家作よし」と記している。

勢至堂で代々旅籠を生業としていた石井周次・善人氏兄弟は「須賀川市勢至堂の宿場は最盛期で人家が四十軒ほどあり、本陣は代々柏木家が務めていました。本陣跡は畑で一族の方々は住んでいません。伊能忠敬が勢至堂村で昼食を取ったことは初めて知りました。この宿場の新しい歴史になります」と話し勢至堂の一里塚へ案内してくれた。

勢至堂峠は伊能日記、伊能図では「板橋峠」と記載している。明治22年の安積郡全図にも板橋峠とある。板橋峠は官名だが、何時から「勢至堂峠」呼ばれる様になったか研究が必要だ。戊辰戦争の記録に勢至堂村と諏訪峠の間に「鶏峠」があり、官軍が「鶏峠」を越えて会津を攻めたとの記録がある。地名考は歴史の発掘に繋がる。



本陣内山茂市家。

「伊能でGO」 フィールドテスト体験記

鈴木 由生子
戸村 茂昭

はじめに

スマートフォン用アプリ *1 「伊能でGO」のフィールドテストを体験しました。テストのポイントとは、第二次伊能測量における房総半島沿岸部測量(享和元年「西暦一八〇一年」六月〜七月)の宿泊地を辿る地域をフィールドとして、スマートフォン用アプリ「伊能でGO」が操作性の面や動作の仕方の面でユーザーの立場から見て問題ないか、また、伊能測量を題材とした商品として知的ワクワク感を醸成できるツールたり得るかなどを評価することにありました。

本稿はその体験レポートです。

*1 アプリとは…アプリケーション(ソフト)のことです。

アプリケーションとは…スマートフォン(以下「スマホ」と呼ぶ)などのパソコンを使って特定の目的を実現するために活躍してくれるソフトウェアのことです。

1. 「伊能でGO」の基本

「伊能でGO」はスマホにアプリをダウンロードして使用します。ダウンロードするとスマホのホ



図1. スマホのホーム画面
伊能でGOのアイコン



図2. 「伊能でGO」起動
直後の画面の状態

にアプリ起動中のスマートフォンを持って入って静止した時点で「足跡を記す」のボタンをタップすると、その地点の伊能忠敬測量隊の宿泊地ポイントを訪れた(伊能忠敬の足跡を辿れた)として

ーム画面上に「伊能でGO」のアイコンが表示されます(図1)のでそのアイコンを指でさわります(この操作を「タップする」と呼びます)。そうしますと、画面にGoogleマップが表示され、そのマップの上に現在地点から半径500m以内に伊能忠敬測量隊の宿泊地があればポイント(●)が重なって表示されます(図2)。



図3. 「伊能でGO」起動
直後の画面の状態

印のスタンプが記録されます。なお、危険回避の為、走行中の車や電車の中では「足跡を記す」のボタンは機能しません。なお、足跡記録はイノペディアHP上の記録者本人のマイページに記録され、状況をいつでも確認できます。

つまり、隠居した50歳から天文暦学を学び、55歳から17年の歳月をかけて日本全国の実地測量を愚直なまでの生真面目さでやり遂げ、日本で初めての精密な地図を完成させたプロジェクトリーダー兼ブレイキングマネージャーたる伊能忠敬が実際に「見た」「歩いた」「声を出した」「食事をした」「天測をした」「日記を付けた」等々言うなれば「伊能忠敬のパワー」が漂うスポットに身を置けたというロマンに浸れるナビゲーターの役割を「伊能でGO」が果たしてくれるということなのです。

また、面白いことに、例えば図3に示すような状態になった時、未だピンが立っていないポイント(●)が存在すると、どうしてもそのポイントを征服したくなるという衝動が人の本性にはあるように私の体験からも感じられ、その事を持ってこのアプリはパワースポット巡りのナビゲーター

という効能を持っているようなのです。

2. 「伊能でGO」の体験記（鈴木由生子）

2017年4月11日（火）、開発中のスマートフォンアプリ「伊能でGO」のフィールドテストをイノペディア編集幹事である戸村茂昭氏（指導のもと実施して参りました）。

テストのフィールドは戸村茂昭氏の地元でもある第二次測量の房総半島が設定され、当日は行徳からスタートして富津まで私のスマートフォン（機種はiPhone）で、残りの銚子までは戸村氏が後日に実施することになりました。テストの内容はアプリ操作時のスマートフォンの動作確認と、第二次測量における房総半島宿泊地ポイントの確認を合わせて行いました。

当日の調査時間は10時〜16時30分。大雨の中でしたが、極力測線に沿っての自動車での走行に同行させていただき、ポイント地点の近辺では車から降りてアプリの動作確認をしました。

江戸時代に行われた伊能忠敬の全国測量の足跡がスマートフォン用アプリ「伊能でGO」の制御下においてGoogleマップに反映され、且つGPS機能を使って辿ることが出来ます。

モニターとしての感想は、ほぼ二百年ほど前に伊能忠敬が宿泊し、天測をし、寝食し、そして翌朝再び測量に出立した場所と同じ地に現代の私たちが自分の脚で立てるといふ、ロマン溢れる体験ができることは、とても素晴らしいことであると感じました。

そして学びながら行動力も高まってくるようです。その地域の地形や歴史を調べながら伊能忠敬の測量の道を通る行動は生涯学習としての充実感も感じられると思います。

また足跡を辿るに連れて新たな足跡がGoogleマップ上に出現することから、その足跡も辿ってみようという行動力が高まって、足跡を記録する達成感も味わるので、幅広い世代の方が楽しめると思います。

記録した足跡は伊能忠敬e史料館ホームページ上のマイページに保存されて一覧表としてみることで、伊能測量隊と自身の足跡を合わせて一

緒に確認することもできる為、日本全国の足跡を巡る励みにもなるのではないのでしょうか。

江戸時代に偉業を成し遂げた伊能忠敬と測量隊の世界を身近に感じ、地図に親しみ、尚且つ壮大な業績を実感できるという期待感高まるコンテンツを包含しているようです。

「伊能でGO」が完成し発表される日がとても待ち遠しいです。

（了）



図4. 当日、「伊能でGo」で辿った
房総の宿泊ポイント

英国伊能小図及び

関連英国海図等の

見学旅行のお知らせ

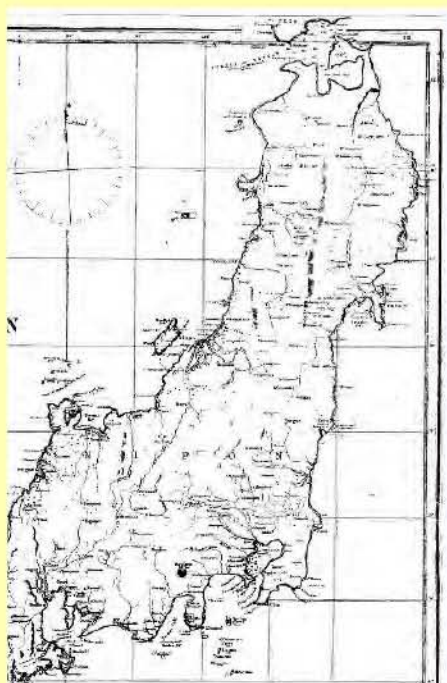
1. 参加のお誘い

(公社)東京地学協会の平成29年度の海外見学旅行は、「英国ジオツアー」として企画され、見どころは2つです。

一つは、英国伊能小図と伊能図を利用して作製された英国海図等の閲覧で、当協会の「伊能忠敬没後200年記念事業」の一つとして行われます。英国小図は江戸時代末期に英国に渡ったもので、英国は世界で初め



英国ナショナルアーカイブの伊能小図



伊能図以前の英国海図(1855年)



伊能図を用いた英国海図(1863年)

て伊能図を評価し、海図を通じて日本の正しい形を世界中に伝えました。

これらの伊能図、海図等はそれぞれ英国ナショナルアーカイブ、英国水路部に所蔵されていますが、そのオリジナルを直接、閲覧することは容易ではありませんが、本旅行では特別に閲覧することができ伊能忠敬の業績を偲ぶ大変良い機会になります。(案内者 元海保海洋情報部長 八島邦夫)

もう一つは英国南部のイギリス

海峡に面する海岸の地質・地形の見学です。英国は世界で最初に地質図を作った国ですが、ここではジュラ紀と白亜紀の地層・化石、白亜の海食崖地形が観察できます。(案内者 日大文理学部講師 矢島道子)

このほか、グリニッジ王立天文台、自然史博物館等も見学します。

2. 旅行の概要

企画主催…東京地学協会

旅行主催…

株式会社 ism (イズム)

Tel : 03-5214 0066

e-mail: info@shogi-kando.com

日程…

平成29年9月4(月)～11(月)
の6泊8日

参加対象者…

地図、地形・地質に関心を有する
一般の方々

募集の詳細等…

株式会社 ism の Web

shogai-

kando.com/pdf/20170904.pdf

(公社) 東京地学協会 HP

www.geog.or.jp

または、八島邦夫

kunio.yashima514@y9.dion.ne.jp

に問い合わせください。

会員便り

「伊能忠敬測量隊 江ノ島・藤沢宿を罷り通る」 講演会開催報告

狼 芳明



平成二八年一月二八日神奈川県藤沢市藤沢公民館において、「伊能忠敬測量隊 江ノ島・藤沢宿を罷り通る」と銘打った講演会が開催されました。（主催者・旧東海道藤沢宿まちづくり実行委員会、後援・藤沢市および藤沢市教育委員会他、協力・伊能忠敬研究会および伊能忠敬e資料館）

当日は、伊能忠敬に興味を持たれている方を中心に160名ほどが参加。事務局側は、予想を超える来場

者への配布資料の刷り増しや補助椅子の手配やら大忙しでした。

講演内容は3部構成になっており、第一部は、伊能忠敬e資料館の横溝高一による忠敬の人物像や伊能図の全体像。特に、如何に正確であったか。また、藤沢宿での測量活動の詳細について測量地点を特定しながら具体的に説明を行った。

それを受けて第二部は、伊能忠敬研究会会員の大沼晃による藤沢宿の三つの名所のひとつである四ッ谷追分を取り上げ、第八次測量の折、東海道から外れ、大山を目指し測量を開始した地点であること。また、今日に至るまで地元の人々よって大山みちの道標や鳥居、不動尊像が大切に保存されていることを新旧の光景をプロジェクトで拡大映写しながら、藤沢宿と大山との結びつきの強さなどを説明。講演会にご招待した、大山阿夫利神社の目黒久仁彦禰宜に飛び入りでご挨拶いただき、禰宜から大山詣では、「藤沢」と「江の島」・「大山」の三つの組み合わせが必要で切っても切れない関係なのですよという趣旨の御言葉を頂戴した。また、四ッ谷町内会長である磯崎三郎さんから帰り際に「大山阿夫利神社とは親子の間。現在でも四ッ谷は大山講を継続しており、結びつきが強いのです」と話があった。

会場でも、講師の話に熱心に耳を傾けている姿が多数見られた。講演会終了後、うら若い女性が横溝さん



の下に駆け寄り、伊能測量隊の観測データなどを欲しいと申し入れがあった。よくよく尋ねたら地図好きのお父さんの代理で参加されたとのこと。

また、当日、横溝さんのご好意により、所蔵の伊能図（大図・中図）など20点あまりを会場内に展示。こちらも盛況で、色々な方から専門的な質問があり、対応にひと苦労するなどうれしい場面も見られた。

第三部は、藤沢市長鈴木恒夫氏による「藤沢の街づくり」と題するワクワク感のある近未来のお話を伺った。主催者からも大変好評であったので次回も何らかの形でお願いしたいとのありがたい言葉を戴きました。

最後に、今回の企画行事を立案されました「旧東海道藤沢宿まちづくり実行委員会」の広瀬様、西貝様、皆川様に厚く御礼申し上げます。

子孫探しの経過と結果報告

熊本県玉名郡 平田 稔

所属する玉名歴史研究会（熊本県玉名市）が年間事業として実施する28年度会員講座の一つを担当し、その第10回講座として「伊能忠敬御用測量の協力者の子孫を探す」のテーマで話した（平成29年3月12日、玉名市民会館）。

来年は伊能忠敬没後200年の節目の年を記念して伊能忠敬研究会が全国的に「伊能忠敬の測量協力者の子孫」を探す運動を昨年2月から実施中であることを紹介。これに呼応して講師が熊本県内の子孫を探してきた経過と、判明した名を報告した。

まず同研究会が「伊能忠敬測量日記」の全解説文をCD化し、これをもとに日時・場所・人名別検索サイト「イノペディア」がウェブ上に公開したことを紹介。これを使って講師自ら、肥後藩と天草（天領）の主要人物名を拾い出し、これに自ら調べ、知人に教えてもらった人名を足して

94人になったことを説明した。

続いてこの94人から、出迎えや宴席に出ただけの庄屋・惣庄屋・藩役人・宿主・医師などを除き、「測量作業に実際に立ち会ったり、事前に他藩に調査に出向いた姓名のある人物」に絞った上で、検索に出ない県内の該当者を古文書などから加えたら約20人になった、と報告した。

さらに20人のうち、伊能測量に係る古文書を自家に所蔵、あるいは団体が所蔵する古文書の元の所蔵者として県内の五家を確認。この五家の古文書を所蔵先(子孫宅、蔵書先伊能忠敬記念館など)に訪ね、古文書の写真を撮らせてもらい、興味深い文書を選択して「熊本県資料集」づくりを進めていること、五家の子孫には来年四月に予定されている記念式典への参加の可否を打診中であることなどを報告した。

電話：0968-86-4213

e-mail: aminoru@abelia.ocn.ne.jp

玉名歴史研究会会員、菊水史談会会員

展示会開催報告

北海道福島町 中塚徹朗

昨日より、函館市隣まち北斗市のギャラリーで

「道南遙かなる歴史街道」
～先人たちの足跡～



というタイトルで小規模な展示が開催されています。

中塚の伊能関連史料も何点か展示しております。

展示場所

ギャラリー日の丘

北海道北斗市西三ツ石

展示期間

5月6～一〇月頭まで

土・日・月のみ展示

入場無料

地図中心に

特集「ジオパーク&灯台総論」

千葉県銚子市 宮内 敏

銚子ジオパークのビジュアセンターで表題の冊子を見つけた。

ご存じのように「地図中心」は伊能忠敬研究会と関係が深い日本地図センターの月刊誌である。

灯台特集なら大吠埼灯台が載っているはず。灯台はブラントンの設計による明治7年点灯の全国に5基ある一等灯台の一つだ。世界の灯台100選にも選ばれている。期待を込めてページを開くと、目代邦康氏の「ジオパーク&灯台」が目に入った。

ジオ＝大地・地球、パーク＝公園

(ジオパークとは大地の公園の意) 因みに目代さんは銚子ジオパークの学識顧問で、何度も銚子に來られ巡検やガイド指導などされている。目代さんなら銚子ジオパークを紹介してくれているに違いない。期待を込めてページをめくった。

屏風ヶ浦の大きな写真2枚が目に入った。目代さんは「ジオパークの目指すもの」、「ジオパークと海岸」、「海岸環境の変化」、「近代化遺産としての灯台」を解説している。

地元、大吠埼ブラントン会代表の仲田博史氏は灯台と周辺について細大漏らさず簡潔に紹介している。

(冊子の銚子関連部分についてのみ記述)

この冊子をご覧になられた会員も多いかと思います。銚子ジオパークはコンパクト(銚子市のみ完結で見どころ満載です。公認ジオガイドがご案内しています。専門的なお話は専門員が対応します(要相談)。

日本遺産の町銚子は江戸時代からの観光名所、大吠埼・屏風ヶ浦に代表される地質遺産は国の名勝・天然記念物です。海の幸、化石海水の温泉もあります。大地の恵みを銚子で満喫されては如何でしょうか。

見どころの詳細・ガイド申込みは銚子ジオパーク公式ホームページ

<http://www.choshi-geopark.jp/>

九州版伊能大図パネル展

佐賀県鹿島市 馬場良平

来年は明治維新150年の年でもあり各地で記念の催しが予定されています。

当地、鹿島市では「完全復元伊能図全国巡回フロア展」で使用された大図「九州版」を使ったパネル展が開催されます。

第1回目 鹿島市民体育館

平成29年6月17日(土)～18日(日)

第2回目 北鹿島体育館

平成29年9月30日(土)～10月1日(日)



情報提供は佐賀の馬場良平さん。西日本新聞に「田川郷土研究会」の活動が大きく取り上げられています。河島悦子氏が参加されています。

福岡県田川市 郷土研究会の活動が新聞に



第3回目 七浦海浜スポーツ公園体育館
平成29年11月11日(土)～12日(日)
七浦海浜スポーツ公園体育館
と3地区で開催されます。
鹿島市は鹿島藩初代藩主のゆかりの地・佐原、現在の香取市と友好都市協定を締結しており、九州版の当地での披露となりました。

新入会員自己紹介

神奈川県 大八木照行



小学生の頃、祖父の測量作業を手伝っており、測量士

て、土木系の高等学校に入り、その道の勉強を始めたのが、昭和三十年でした。その頃に伊能忠敬が、五十年過ぎから全国を歩いて測量をして、全国地図を初めて作った人であり、それは自分の生命が尽きた三年後であった事を知りました。この響きと感動はものすごいものです。

私は全ての作業を行う時、疑問なところは無いが、疑う眼を持っておりました。

そして北海道は働ける時間が少なく、五月より九月までであらうし、道無き道を測らなければならぬので距離計測が難しいのです。

その時、新聞が「北海道上半分は間宮林蔵氏が測量」と知り、疑問が解けたのでした。

私も測量士となり測量方法の各種を知り、当時の測量方法と比較して研究したいと思っています。入会をさせて頂き感謝いたしております。

兵庫県篠山市

津田博利



はじめまして。津田博利と申します。このたび伊能忠敬研究会に入会させて

いただきましたありがとうございます。今後いろいろとお世話になります。よろしくお願いします。

私は、兵庫県篠山市(旧丹波國)に生まれ、育ち、今も生活しています。

伊能忠敬測量隊が、第七次と第八次の二回にわたり篠山を測量しています。特に第八次では、内陸部である篠山を十日間測量しています。

そして、私は、この伊能忠敬のすばらしさに感銘して、地元で「伊能忠敬篠山領探索の会」に所属しています。実際に測量した道を自分の足で辿り、伊能隊の測量の正確さを体現しています。

地域の人達(小学生初め大人まで)に、伊能忠敬の偉大さを知ってもらいたいと、会員一同がんばっています。

まだまだ伊能忠敬のことを知りたいと思っていますので、皆様方のご教授いただきますようお願いいたします。

高井正巳



伊能忠敬先生の学問に対する情熱、その生き様に感銘を受けました。多くの方に

忠敬先生の魅力を伝えたいと思い、個人で草の根的に活動をして参りました。例えば、地域の読書会等で伝記本を紹介し、忠敬先生に興味を持ってもらうという活動です。

忠敬先生の認知度向上を目指し、学ぶことの楽しさや喜びをより多くの方に伝えていきたいと考え、この度、伊能忠敬研究会に入会いたしました。会報を拝見し、研究会の皆様の高さに敬服しております。これから忠敬先生についてさらに勉強していく所存です。若輩者ですが、何卒よろしくお願いいたします。

退会者

吉田義昭さん

東京都 浅井京子さん

訃報

六代目伊能家長女

井上靖子さん

ご冥福をお祈り申し上げます。

紙上総会の結果報告

本年（平成29年度）の総会は、1年後にせまった行事に向け会員・役員双方の負担軽減を勘案して、変則ながら集会をとりやめ、全会員に郵送で6議案の承認をお願いしました。

議案については、5月28日までに以下のとおり回答があり、すべて承認されました。

なお、議案の内容に変更はありませんが、承認に際し会員からご指摘いただいた誤記、説明不足、記載方法の不統一を訂正・追加しております。ご指摘ありがとうございました。

会員 数：198

回答総数：134

（その他、退会のため議案について無回答2通）

（個別議案については、平成28年度収支報告と平成29年度予算案に誤記があったため、不承認が各1件ありましたが、その他はすべて承認でした。なお、誤記部分は訂正しました。）

平成28年度

伊能忠敬研究会事業報告

1. 会員動向（平成28年4月1日～平成29年3月31日）

・入会者…15名

金七修、古村佐和子、大星正嗣、平田稔、松宮由生子、松本和典、曾根田馨、松尾政信、岩本敏、清水祥、荒井忠秋、岩橋伊津子、嶋田秀樹、石橋明、稲葉末明

・退会者…5名

穂吉正明（逝去）、川村優（逝去）、加藤時男、花田敏行、宮地滋

2. 事業等

・総会 平成28年6月4日、熱海市起雲閣、懇親会（うみのホテル中田屋）46名参加

・巡検 平成28年6月5日（伊豆山神社等）29名参加

・講演会 平成28年6月4日、熱海市起雲閣 83名参加

・講演 渡辺一郎「伊能測量隊の伊豆測量」

・座談会 「伊能忠敬の人と仕事」
コーディネーター…鈴木純子

パネリスト…熱海市長 齊藤 栄、伊能 洋、榎本隆充、木内志郎

・理事会 第1回 平成28年5月21日（設立20周年記念総会準備）

第2回 平成29年3月26日（伊能忠敬没後300年記念事業、平成29年度総会等）

・会報発行

79号（64P 630発行）、
80号（72P 930発行）、
81号（56P 228発行）
79号から製本を無線綴に変更

・後援・協賛事業

平成28年8月6日、7日、専修大学
専修大学文学部創立50周年行事
「伊能忠敬の原寸大復元大図フロア展」

講演：平成28年8月7日 「伊能図を見る」鈴木純子

平成28年11月4日～13日、福島市
アクティブシニアセンターA・O・N
地図展協議会 地図展2016「ももりん 福島の魅力」

講演：「確かめた日本の形―伊能図の特色と意義―」鈴木純子（11月5日）
平成28年11月26日、千代田区（弘済会館）

東京地学協会 講演会「伊能忠敬と現

代の地図作り」

講演：伊能忠敬の全国測量と測量日記「星埜由尚」

平成28年10月29日～平成29年3月11日 江東区文化センター

講座：没後300年 伊能忠敬の世界
「新たな発見と魅力」

講師（渡辺一郎、鈴木純子、戸村茂昭）
平成29年2月7日、千葉県佐倉市
（佐倉市中央公民館）

佐倉市民カレッジ 講演：伊能忠敬
の人間像―人生を二度生きる―鈴木
純子

※講演は研究会として対応したものに限り掲載。会員個人の活動は掲載していません。

・記者発表
平成28年4月18日 福岡市立中央
市民センター

「伊能測量旅程・人物全覧データベース紹介と講演の集い」

講演「伊能忠敬の九州測量を支えた人々」渡辺一郎

平成28年12月26日 銀座ブロッサム

伊能測量隊全宿泊地掲載 Google
マップの公開

平成 28 年度 伊能忠敬研究会収支報告

収入

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
会費	970,000	900,000	-70,000	
会誌売上	30,000	65,400	35,400	
事務所賃料返納		16,500	16,500	3,300×5月(前納分返金)
利息		1	1	
前年度未納支払 (前年度繰越金)		10,000	10,000	
合計	1,000,000	991,901	-8,099	1,973,609

支出

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
会報作成費	480,000	353,900	-126,100	印刷費、編集費
会報発送費	80,000	49,845	-30,155	ヤマト便 2回分、事務局からの送付代
事務所賃料	272,100	268,800	-3,300	22,400×12月
記念事業費	500,000		-500,000	繰越金から支出
通信費	60,000	39,822	-20,178	電話代、銀行振込手数料
事務費	80,000	163,872	83,872	記者発表会場(福岡市立中央市民センター) 費33,220、封筒印刷42,822、記念総会 64,371、交通費20,000、消耗品等
予備費	27,900	15,000	-12,900	初穂料10,000、会費返納5,000
(前年度繰越金)				1,973,609
合計	1,500,000	891,239	-608,761	

会計期間：平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

貯金残高 ゆうちょ銀行 2,153,727 円

みずほ銀行 280,544 円

合 計 2,434,271 円

貯金残高には、平成 29 年度会費 395,000 円を含む

上記のとおり報告します。

平成 29 年 5 月 28 日

事務局長

菱山 剛 敬

平成 28 年度 伊能忠敬研究会監査報告

平成 28 年度収支報告は、入出金記録簿と証拠書類を照合し確認した結果、適正と認めます。

平成 29 年 5 月 28 日

監

事

清水 靖夫 敬

平成 29 年度 伊能忠敬研究会
業計画1. 会員動向(平成 29 年 4 月 1 日)
平成 29 年 4 月 30 日)・入会者…2名 神崎 亮
大八木照行

2. 事業等

・総会 会員に総会資料を郵送し、
議事内容を確認いただく紙上による
総会とする。このため、総会と同時に実施してい
る巡検、講演会は中止する。

・理事会

第 1 回 平成 29 年 4 月(平成 29 年
度総会資料確認 書面確認)

第 2 回 平成 29 年 9 月

(伊能忠敬没後 200 年記念事業進捗
確認)

第 3 回 平成 30 年 2 月

(伊能忠敬没後 200 年記念事業準備)

・会報発行

82 号 (60p) 6 月発行)、
83 号 (60p) 10 月発行)、
84 号 (60p) 2 月発行)

・後援・協賛事業

地図展協議会 地図展への協力
東京地学協会 伊能忠敬没後200年
事業への協力
日本地図学会 機関誌「地図」
特集号への協力

3. 伊能忠敬没後200周年記念行事

・記念出版

「伊能忠敬測量の足跡」(仮題)
(平成30年3月) A4判250頁予定

・測量協力者顕彰大会・懇親会

平成30年4月21日(土)
会場：学士会館(東京都千代田区神
田錦町)

・都内の伊能ゆかりの地視察

平成30年4月22日(日)

平成29年度 伊能忠敬研究会予算

収入

項目	前年度予算a	当年度予算b	増減b-a	備考
会費(当年度)	970,000	1,000,000	30,000	
会費(前年度未納分)		105,000	105,000	
会誌売上	30,000	30,000	0	
前年度繰越金	1,973,609	2,039,271	65,662	
(次年度以降会費)				20,000
合計	2,973,609	3,174,271	200,662	

支出

項目	前年度予算a	当年度予算b	増減b-a	備考
会報作成費	480,000	380,000	-100,000	印刷費、編集費(60p×400部×3回)
会報発送費	80,000	100,000	20,000	4回分(前年度81号分1回追加)
事務所賃料	272,100	268,800	-3,300	22,400×12月
記念事業費 (繰越金から支出)	500,000	2,200,000	1,700,000	記念誌作成140,000(前年度未使用分を含む)、記念事業800,000
通信費	60,000	50,000	-10,000	電話代、銀行振込手数料
事務費	80,000	160,000	80,000	資料印刷、交通費、切手購入代、消耗品等
予備費	2,001,509	15,471	-1,986,038	前年度予算予備費には、当初27,900+繰越金1,973,609を加えている。
合計	3,473,609	3,174,271	-299,338	

※繰越金は、伊能忠敬没後200周年記念事業のため、当年度事業費に組み込んでいる。

伊能忠敬研究会 役員改選

伊能忠敬研究会会則第8条により役員改選を行う。

(新役員候補)

伊能忠敬没後200周年記念行事実施のため、以下の役員体制を継続することとする。

名誉代表…渡辺一郎
代表理事…鈴木純子
理事…伊能楯雄

…伊能洋

…河崎倫代(記念誌)

…新沢義博(行事)

…高安克己(会報)

…菱山剛秀(事務局長・

会報)

…宮内敏(会報)

…山本公之(事務局)

監事…清水靖夫

特別顧問…宇井成一

…星埜由尚

幹事…戸村茂昭

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×4段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくことがあります。

②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的にJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

送り先

・電子メール添付の場合 kaho@inoh-ken.org

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第83号)は2017年10月発行 原稿×切は8月31日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール mail@inoh-ken.org (留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

郵便振替口座 00150-607216100

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館「Inopedia(イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典
<http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料
<http://members.jcom.home.ne.jp/i-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料
<http://www.tlrm.or.jp/~koko>

編集後記 ◇五月の大吹雪が好きた。空の青、海の青、そして白亜の灯台。灯台のバルコニーから放射状に綱が張られ鯉のぼりが空を舞う。磯遊びもいい。海岸植物もいい。人出もいい。イベントもいい。子供の日はなぜか天気がいい。◇最近デビューしたのがジオガイドだ。心地よい風を頬に受けて出番をテントで待つ。しばらくして自分にも依頼が来た。お客さんとはつくば市から来られたご夫婦と娘さん。研究機関にお勤めかな、お嬢さんは高校生、それとも、そんなことを意識しながらの案内。気を使っただけなのに要所で質問も。久ぶりの楽しいガイドとなった。◇今月は編集担当なのだが四月末の締切を過ぎても原稿が集まらない。「何とかなるさ」とたかを括りゴールデンウィークを楽しんだ。五月後半、ありがたい投稿があり俄然忙しくなった。原稿の流し込みやレイアウトなら確かに何とかなる。しかし、内容に関するとなると話は違う。内容に応じて見識をもった方々の意見を聞く必要がある。同方々はおられるのだが原稿が早めに集まっていなければそれも機能しにくい。やはり、締切日までに投稿いただくことがより良い紙面づくりには欠かせない。(S・M)